

仏蘭西学研究

2017(平成 29). 6. 24

第 43 号

目 次

[論 文]

ポール・クロードルと元老 ……………学谷 亮… 3

フランス側史料にみるフランス傷病兵日本後送の経緯
……………原野 昇…14

19世紀におけるフランス人宣教師の琉球滞在について
—宣教活動と語学学習を中心に— ……宮里厚子…27

「*Choix de lectures françaises* シリーズ」における
地方主義の描写 ……………中村能盛…40

中村光夫の青春とフランス体験
—1930年代から『戦争まで』及び1940年代へ—
……………浜田 泉…47

[講 演]

ギヨーム・クールテ—日本に初めて来航したフランス人—
……………市川慎一…65

[書 評]

片桐一男著『江戸時代の通訳官—阿蘭陀通詞の語学と実務』—
……………岡田和子…79

学会記録……………89

日 本 仏 学 史 学 会

仏蘭西学研究

2017(平成 29). 6. 24

第 43 号

目 次

[論 文]

- ポール・クロードルと元老学谷 亮… 3
- フランス側史料にみるフランス傷病兵日本後送の経緯
.....原野 昇…14
- 19世紀におけるフランス人宣教師の琉球滞在について
—宣教活動と語学学習を中心に—宮里厚子…27
- 「*Choix de lectures françaises*シリーズ」における
地方主義の描写中村能盛…40
- 中村光夫の青春とフランス体験
—1930年代から『戦争まで』及び1940年代へ—
.....浜田 泉…47

[講 演]

- ギヨーム・クールテ—日本に初めて来航したフランス人—
.....市川慎一…65

[書 評]

- 片桐一男著『江戸時代の通訳官—阿蘭陀通詞の語学と実務』—
.....岡田和子…79
- 学会記録.....89

日 本 仏 学 史 学 会

フランス側史料にみるフランス傷病兵日本後送の経緯

原 野 昇

はじめに

このたびフランス側の史料の中から、どのような経緯でフランスの傷病兵を日本の広島へ後送することになったかの一端を明らかにするものが見つかったのでここで紹介したい。これまで扱った史・資料は、日本側でフランス傷病兵を受け入れることになった経緯を明らかにするものであったが、今回の史料は、フランス側で治療を日本に依頼することに至った経緯を明らかにするものである。

1900年（明治33）に中国で義和団の乱鎮圧^①にあたったフランス軍の傷病兵120余名が広島で陸軍病院に搬送され治療が施された件に関しては、本学会においてこれまで6回報告させていただき、『仏蘭西学研究』にも掲載していただいた。本稿に関連の深いものとしては以下のようなものがある。

日本側史料

- ・病院船「博愛丸」派遣に関連する史・資料―「負傷フランス兵広島で治療の経緯」、『仏蘭西学研究』35号（2007年）、pp.37-49.
- ・フランス兵の待遇に関連する史・資料―「広島における負傷フランス兵の待遇」、『仏蘭西学研究』36号（2010年）、pp.3-15.
- ・広島で死亡した兵士の葬儀の様子―「広島フランス人墓地」、『仏蘭西学研究』28号、pp.30-39.

フランス側史料

- ・病院での待遇に関連する史・資料―「1900年に広島で治療を受けたフランス人兵士」、『仏蘭西学研究』35号、pp.10-25.

1. 史料について

当該史料というのは、フランス国防史料館 Service historique de la Défense⁽²⁾所蔵の「渤海湾（1900年6－8月）における軍事行動中の保健部隊の医療業務報告抜粋 Extrait d'un rapport médico-chirurgical sur le Service de Santé pendant les opérations militaires dans le Petchili (Juin-Août 1900)」という報告書である。史料名および分類番号は、分類記号「GR11H27」、 「中国派遣軍関係／書類番号27／ファイル番号5／文書番号6」（Expédition de Chine／Dossier 27／Chemise 5／No 6）である。

同報告書は、第1部「負傷者日本へ後送の経緯 I^o Renseignements sur l'évacuation des blessés au Japon (pp.1～7)」と第2部「銃弾および砲弾による負傷の状況 II^o Renseignements sur les blessures produites par les balles et les obus (pp.8～11)」の2部からなっている。第2部は主として医学的見地からの兵士たちの負った傷の状況と、それから分析した敵の武器弾薬およびその破片などに関するものである。ここでは第1部のみを紹介する。

2. 報告書の日本語訳

渤海湾（1900年6－8月）における軍事行動中の保健部隊の医療業務報告抜粋
第1部 負傷者日本へ後送の経緯

負傷者後送の可能性に関しては、近隣に領土を有している他のほとんどの列強国に比べて、我が国は明らかに不利な立場にある。ロシア人には、旅順港、長崎の病院⁽³⁾、ウラジオストックがあるし、ドイツ人には、膠州湾租借地の青島があり、イギリス人には、威海衛や少し先の香港がある。本国から目と鼻の先の日本人については言うに及ばない。それに反し我が国の唯一の方策はインドシナしかない。何と離れた場所だろうか！衛生状況が最悪のこの国で激しい戦闘の末に負傷した我が国の兵たちがそこに辿り着くまでにどうなるであろうか。特に疲労と出血で瀕死の状態にある重傷患者にとっては、一年のこの時節（7・8月）、死の宣告にも等しいものではなからうか。私がサイゴンへの後送を断念したのは、重傷患者にとっては死刑宣告にも等しいと確信した結果の最終的な決断であった。そこに到着する兵士たちの疲れきった惨めな姿を容易に予想できた。彼らは出発前から負傷したり罹患し

ているので、そこに到着する前に命を落とす者が出るであろう。結果として、コーチシナは病院まで動員したと言われても仕方なかろう。彼らを移送する艦船は、途中のトゥーラン市⁽⁴⁾や香港で何人かずつを下船させながら、サイゴンまで運ぶのは20～30人ということになろう。無事到着できた者の内の多くは数日ももたないであろう。コーチシナを利用しようと思った矢先、幸運にもそれが不可能となった。というのも、(少なくとも当初は) 移送手段が極めて不十分だったからである。

同じことはメークル医師が指揮していた横浜の病院⁽⁵⁾への後送についても言えた。作戦基地から離れ過ぎている横浜は、そもそも50人くらいしか受け入れる余地が無かった。

太沽の近くの烟台にはフランス人シスターが運営する病院があったが、状況の悪化にともない、当時ほとんどの外国人は日本へ避難していた。ちょっとした民衆の蜂起によって無防備のまま虐殺される可能性のある病院へ、どうして負傷者を送ることができようか。

フランス本国への直接後送とは言えば、考慮にさえ入れるべきではないだろう。我々はそのような特殊目的のために整備された艦船を保持していないのだから。その上、重傷患者に、1年のうちでも特にこの時期は煮えたぎる大釜とも言われるインド洋や紅海を通過しての長い航海を強いることは大きな罪を犯すことになる。

こうして問題解決の糸口が見つからないように思えていたとき、7月6日から7日に日本赤十字社の病院船「博愛丸」が太沽港に着港し、すべての国籍の病人を受け入れる用意があると言ってきたのである。補足しておくが、他の列強の病院船もそのとき(またそれ以降も)太沽港に到着していたが、それらは厳格に自国の病人に限定されていた。日本人のみが国籍を区別することなくすべての病人に治療を提供することを申し出ていた。かくして一番最後に近代文明の仲間入りをした彼らが博愛精神の手本を示したのである。ヨーロッパこそが博愛精神の唯一の手本であると自認していたが、それは間違っていたのである。

負傷者の問題に当然のことながら大いに意を払っていた海軍司令長官が私を「博愛丸」に派遣したので、私は細心の注意を払って同艦を検分した。同艦自体の詳細はここでは問題外なので省くが、近代的病院としての衛生面に関しては申し分のない装備であったことだけを指摘しておく。特に清潔さに関しては、すべての場所の隅々にいたるまで非の打ちどころがなかった。治

療は通常医療部門と外科部門に分かれていた。後者には広大な手術室があり、換気や照明も非常に良く、器具類もすべて揃っており、近代病院のそれにひけを取らないものであった。医師は4人おり、33人の看護師と11人の看護婦がいた。私は彼ら全員と会ったが、全員よく教育されており、最良の印象をもった。付属設備（浴槽、洗濯場、製氷機、等々）もすばらしいものが整っていた。食事は、希望によって、和食でも洋食でもよかった。同艦は200人の患者を受け入れることが可能であった。その内訳は、1室に2段ベッドが1つの将校用の部屋24人分。その部屋は、必要な場合にはベッドとして使用できるソファが備えられているのでさらに12人の将校を受け入れることができる。下士官14人分、そして最後に一般兵卒114人を収容できる2段ベッドが並べられた、天井が高く換気がよく効いた広大な1室である。これらの部屋から離れた場所に42台のベッドを備えた伝染病（赤痢、腸チフス、等々）患者用の隔離病室があった。そこは必要な場合には、さらに厳重な隔離が可能であった。

「博愛丸」はじゅうぶんな数の患者を収容すると直ちに彼らを広島 of 病院に運ぶことになっていた。入れ代わりに同型の病院船「弘済丸」が太沽港に入港することになっていた。そして両艦の頻繁な交互輸送は必要な限り続くことになっていた。

「博愛丸」を検分した結果、我が国の傷病兵たちは最良の条件下で治療を受けることができると確信した。しかしながら我が軍は、特に病人輸送のために、太沽に駐留することになってはいなかったもので、日本当局の事前の了承を得ておく必要があった。そこで司令長官は私に紹介状を持たせて、「常磐」艦上にある日本の常備艦隊司令長官・東郷提督のもとに派遣した。同艦においても私は「博愛丸」のときと同様、非常に丁重な歓待を受けた。彼らは私の要求を満たすために最善を尽くしてくれた。彼らは我が国の傷病兵を日本の病院へ受け入れることを保証してくれただけでなく、私が望むだけの人数を送るようにと非常に親切に勧めてくれた。彼らはどこの病院がいいか私に選ぶようにと言ってくれた。私は広島 of 病院を望んだ。なぜならば、広島が日本赤十字社の病院船の最終到着地であり、一番便利が良かったからである。その上私は、広島 of 病院は非の打ちどころのない設備を備えていることを知っていた。私が「常磐」を訪問した翌日東郷司令長官は私のもとに一人の将校を派遣し、日本政府が喜んで我が国の傷病者を受け入れ、彼らが快適に治療が受けられるために最善を尽くすと改めて保証してくれた。⁶⁾日本が西

洋列強諸国の大部分が所有するものよりもはるかに優れた病院船2隻をかくも速やかに派遣したことを誇りに思って当然だと、私は以前から確信していた。フランスは真っ先に彼らに傷病兵を委ねたことによって、彼らに最大の称賛と敬意を示したことになる。私は先立っての滞日経験において、日本人医師の技術水準の高さから言って、彼らによる治療はヨーロッパの優秀な病院のそれと比べて遜色がないということを知っていた。したがって司令長官は私に、我々がすでに収容している患者およびこれから収容するであろう患者を広島に移送することを躊躇することなく許可した。

解決すべき問題がもう一つ残っていた。同病院船の医師たちは彼らの母語以外に英語しか喋れなかった。患者たちに同道して同艦に行ったとき、私は患者の病状をできるだけ多く英語で書き記し、さらに口頭でも伝えた。しかし航海中においても通訳は不可欠であった。さらに、我が国の領事がない広島に患者たちを放っておくわけにもいかなかった。非常に幸運なことに艦隊には、英語のみでなく日本語も喋れる一人の将校、マルチニー大尉がいた。司令長官は彼を患者輸送の第1便に同道させ、広島に残るように命じた。彼はそこでそれ以来非常に大きな役割を果たした。—第2便では、ちょうど同便で患者として後送されていたフランスの天津駐在武官、ヴィダル中隊長が通訳の役を自ら買って出た。—第3便には、「ダントルカストゥ号」乗り組みの海軍士官学校2年生を乗船させた。最終の第4便では5人の患者しか後送されておらず、概して病状は軽く、僅か3日の航海なので通訳は必ずしも必須ではなかった。もっともその頃には必要な英語が喋れる将校はいなかったというのも事実であるが。

我が国の患者の待遇に関して信頼できる筋からの報告によると、私の多少楽観的過ぎるくらいのある指摘をはるかに越えたものであった。ヴィダル中隊長の証言によると、広島病院の設備は病院として理想的なものであり、徐々に我が国の傷病者専用になっていったとのことである。帝国政府はその病院に、ドイツの大病院で教育を受けた最良の外科医を派遣した。⁽⁷⁾食事に対する細やかな配慮も忘れられてはならない。そこには東京の一流ホテルのシェフが派遣されていた。我が国の傷病者は到着直後から、天皇の侍従武官、皇后の高級女官をはじめ、日本赤十字社の代表、地元県市のほとんどすべての代表の見舞いを受け、各方面から見舞いの贈答品をもらった。これは日本人が客人を歓待するときの習慣である。永眠した者の葬儀は誠に荘厳で、あらゆる市民が参列した。ごく最近も、快癒した我が将兵が帰国するに際し、

皇后陛下が彼らを暫し引き留め、彼らに義肢を贈られた。私はあえて意図的にこれらの詳細に触れたが、それはこれらの事実は語られて然るべきだと思うし、一般の人に広く知られることはさらに良いことだと思うからであり、我が傷病兵たちが日本の為政者および全国民をあげて心を込めて懇切に待遇されたということは、フランスにおいて知られるべきことだと思うからである。我が将兵たちは、天津の戦場において、日本人医師や将校が日本人将兵たちに対するのと同様に、我が将兵たちに対しても献身的に振る舞ったということ、彼らの立場から証言するであろうことを私は確信している。実際、我が近代文明が誇りとする人類愛に基づく連帯の精神を、日本人ほど忠実に実行に移した国民はヨーロッパにはない。

3. この報告書から明らかになったこと

(1) 広島に陸軍病院を選択するまでの経緯

日本側史料に、「病院船博愛丸の派遣と同時に海軍大臣は在太沽艦隊司令長官をして同船には各國傷病者をも搭載すべき旨を在太沽各國海軍指揮官に通報せしめしに佛國海軍少将クールジョールは我艦隊司令官に對し同國患者を博愛丸に収容せんことを依頼せり」⁽⁸⁾とあるが、今回の史料はそれ以前にフランス側で種々の可能性について検討した結果日本に依頼するのがベストであるという結論を得たものであることが詳細に記述されている。

(2) 病院船「博愛丸」の実地検分

日本に依頼するのがベストであるという最終結論を出す前に、フランス傷病兵たちが収容され治療を受けるであろう当該病院船「博愛丸」の実地検分を行い、その施設・設備等を入念に検証している。その日本側の受け入れ体制および「博愛丸」の施設・設備等を含む医療環境について非常に高い評価を下している。

(3) 病院船「博愛丸」の構造・施設・設備

「博愛丸」の構造・施設・設備についての日本側の史料は未見である。それゆえ今回の史料に記載されていることはすべて初めて明らかになったことである。⁽⁹⁾それによると、

- ・同艦は200人の患者を受け入れることが可能、その内訳は、1室に2段ベッドが1つの将校用の部屋24人分（＝12室）。その各室にソファ

ベッドがあるのでさらに12人受け入れ可能（＝計36人）。下士官14人分（＝7室？）、一般兵卒用の天井が高く換気がよく効いた広大な1室、2段ベッドが並べられており、114人を収容可能（＝57台の2段ベッド）。これらの部屋から離れた場所に42台のベッドを備えた伝染病患者用の隔離病室。

- ・治療は通常医療部門と外科部門に分かれている。後者には広大な手術室があり、換気や照明も非常に良く、器具類もすべて揃っている。すべての場所の隅々にいたるまで清潔で、非の打ちどころがない。
- ・医師4人、看護師33人、看護婦11人、全員よく教育されている。
- ・付属設備（浴槽、洗濯場、製氷機、等々）もすばらしいものが整っている。
- ・食事は、希望によって、和食でも洋食でもよい。

（４） 通訳の配慮

傷病フランス兵の広島への輸送が第1便から第4便までであったこと、⁽¹⁰⁾ それぞれの便に患者と日本人医師・看護師との意思疎通のために通訳の配慮をしたことが詳述されている。

（５） 広島 of 病院の様子

本報告書の最後の段落より前の部分は、主としてフランス傷病兵を日本（広島）へ後送することに至るまでの経緯が述べられているが、最後の段落は、実際に傷病兵を広島に後送した結果、彼らがどのように遇されたかについて、第2便で患者として後送されたフランスの天津駐在武官・ヴィダル中隊長の証言という形で報告されている。具体的には、広島 of 病院の設備の立派さ、優れた医師陣、食事に対する細やかな配慮、皇室をはじめとする各界からの慰問および贈答品、葬儀の荘厳さおよび葬列への市民の参列、帰国兵に対して皇后陛下から義肢の贈与があったことなどである。これらのうちの大部分は、これまで筆者が紹介してきた日本側史・資料でも言及されている事柄であるが、⁽¹¹⁾ 食事に対する細やかな配慮の例として、「東京の一流ホテルのシェフが派遣されていた」のような記述は初見である。

（６） 日本 of 人道主義の評価

これまで筆者が紹介してきた日本側史・資料によって、日本の当時の指導者たちが欧米先進国から日本が彼らの国に引けを取らない国と認められようと最善の努力をしていた様子は明らかになっている。なかでも

それら先進国の間で重んじられている国際的人道主義の精神を日本も尊重していることを目に見える形で表すのに、フランス傷病兵の受け入れは良い機会ととらえられ、受け入れや治療の責任体制が当初の民間団体・日本赤十字社から政府自身（具体的には陸軍医務部所属の陸軍病院）へと閣議を経て変更され、種々の細かな配慮がなされたことが明らかになっていた。⁽¹²⁾

そのような日本側の配慮が、当の先進国側からどのようにみられていたか、具体的に言えば、広島病院でのフランス傷病兵の待遇がフランス側からどのように評価されていたかは十分には明らかになっていなかった。自身が広島病院で70日間の入院生活を送りフランスに帰国した兵士アントナン・ジャックマン Antonin Jacquemanの私信⁽¹³⁾や、治療後帰国する兵士の送別会における兵士代表の謝辞の新聞記事⁽¹⁴⁾などを通して、治療を受けた当事者たちが上記のような日本側の配慮を好意的に評価していた様子は伺うことができていた。しかしフランスの責任者たちの直接的な評価の言葉などは未見であった。本報告書では、「我が傷病兵たちが日本の為政者および全国民をあげて心を込めて懇切に待遇されたということ」、「日本人医師や将校が日本人将兵たちに対するのと同様に、我が将兵たちに対しても献身的に振る舞ったということ」を強調し、「かくして一番最後に近代文明の仲間入りをした彼らが博愛精神の手本を示したのである」と述べ、最後に「実際、我が近代文明の誇りとする人類愛に基づく連帯の精神を、日本人ほど忠実に実行に移した国民はヨーロッパにはない」と最大級の賛辞で報告書を締めくくっている。

4. 報告書の執筆者について

本報告書には、文書の宛先、作成者名（執筆者名）、文書作成年月日の記載が無い。表紙に手書きのタイトル「渤海湾（1900年6-8月）における軍事行動中の保健部隊の医療業務報告抜粋 Extrait d'un rapport médico-chirurgical sur le Service de Santé pendant les opérations militaires dans le Petchili (Juin-Août 1900)」が記されており、それが四角い枠で囲まれている。（図版1参照）その枠内に丸いゴム印が押されており、円形に沿って「国防省 MINISTERE DE LA GUERRE／陸軍参謀本部 ETAT MAJOR DE L'ARMEE」の文字、その内側に「古文書部 ARCHIVES／HISTORIQUES」

という2行にわたる文字が読める。また、左下には四角いゴム印が押されており、4行にわたって文書のジャンル、分類番号が記されている。それぞれ数字（「27」、「5」、「6」）の部分は手書きの書き込みである。

「中国派遣軍関係Expédition de Chine」

「書類番号Dossier 27」

「ファイル番号Chemise 5」

「文書番号No 6」

本報告書は他の数10点の史料と一緒に1つの箱の中に収められており、その箱には「GR11H27」というフランス国防史料館の分類記号・番号が付されている。

タイトル「報告抜粋Extrait d'un rapport …」から判断すれば、誰かが誰かに宛てた報告書の抜粋であるが、抜粋でないより詳しい報告書が別に存在するの可否かは不明である。宛先はゴム印に「陸軍参謀本部」とあるので、陸軍参謀本部長か国防大臣ではないかと推測される。

肝心の執筆者についてであるが、執筆者の立場・身分を推測させるいくつかの文章が報告書の本文内にみられる。たとえば、

- ・「私がサイゴンへの後送を断念したのは、重傷患者にとっては死刑宣告にも等しいと確信した結果の最終的な決断であった。」（後送先を決める最終責任者）
- ・「海軍司令長官Amiralが私を「博愛丸」に派遣したので、私は細心の注意を払って同艦を検分した。」（司令長官の部下）
- ・「司令長官は私に紹介状を持たせて、「常磐」艦上にある日本の常備艦隊司令長官・東郷提督のもとに派遣した。」（司令長官の部下）
- ・「彼らは我が国の傷病兵を日本の病院へ受け入れることを保証してくれただけでなく、私が望むだけの人数を送るようにと非常に親切に勧めてくれた。彼らはどこの病院がいいか私に選ぶようにと言ってくれた。私は広島の実業家を望んだ。」（日本側からみてフランス側のかかなりの責任者）
- ・「私が「常磐」を訪問した翌日東郷司令長官は私のもとに一人の将校を派遣し、日本政府が喜んで我が国の傷病者を受け入れ、彼らが快適に治療を受けられるために最善を尽くすと改めて保証してくれた。」（日本側からみてフランス側のかかなりの責任者）
- ・「私は先立っての滞日経験において、日本人医師の技術水準の高さから言って、彼らによる治療はヨーロッパの優秀な病院のそれと比べて遜色がない

ということを知っていた。したがって司令長官は私に、我々がすでに収容している患者およびこれから収容するであろう患者を広島に移送することを躊躇することなく許可した。」(滞日経験者、司令長官の部下)

などである。

日本側の史料に、「佛國海軍少将クールジョールハ我が艦隊司令官ニ對シ同國患者ヲ博愛丸ニ収容センコトヲ依頼セリ」⁽¹⁵⁾とあるので、フランス側の最高責任者は海軍少将クールジョール Courrejolles であった。本報告書中で「海軍司令長官 Amiral」と呼ばれている人物も、文脈から判断すれば、フランス側の現地最高責任者だと思われるので、名前は明記されていないが、クールジョールのことだと考えてよからう。⁽¹⁶⁾

したがって本報告書の執筆者は「クールジョールの直近の部下」とみて間違ひなからう。上に引用した文章のなかには、後送先決定の最終責任者ととれるものもあるが(たとえば最初の引用文)、その私の最終的な判断を最終的責任者である司令長官が採用してフランスの最終結論とした、と解釈することは不可能ではないと思われる。執筆者と推定される「クールジョールの直近の部下」の氏名は今のところ詳らかにしないが、フランス側の史料を調査すればいずれから明らかになるであろう。

(注)

- (1) 日本では北清事変と呼ばれている。
- (2) パリのChâteau de VincennesにあるService historique de la Défense (略称SHD)の日本語訳としては、「フランス防衛省国防史編集部」(中津匡哉訳)、「国防史編集部(フランス軍)」(Wikipedia)などがある。「Service」の訳し方であるが、実態が古文書館的なものであるので「資料館」と訳しておく。(なお、大使館広報部に問い合わせたところ、定訳は無いが「フランス国防史料館」でよからう、という返事もらった。2016.1.22)
- (3) 長崎の稲佐の「ロシア村」にあった病院のこと。
- (4) 現ダナン市
- (5) 横浜にあったフランス海軍病院。日本における諸外国の海軍病院のなかでも最も早く開設されたフランス海軍病院は1864年6月に建設が開始されている。
- (6) 日本側の受け入れ責任体制が、閣議決定により、民間の日本赤十字社から日本政府に変更されことを通知したものと思われる。原野昇「負傷フランス兵広島で治療の経緯」、『仏蘭西学研究』35号(2007年)、p.43。
- (7) 陸軍軍医学校教官三等軍医正・芳賀榮次郎のこと。前掲論文、p.43。
- (8) 「明治三十三年 清国事變史附録第三 人馬衛生業務」。原野昇「負傷フランス

兵広島で治療の経緯」、『仏蘭西学研究』35号（2007）、pp.42-43参照。

- (9) 「博愛丸」に関する史料を博搜すれば、その構造・施設・設備についての記録も見つかるであろう。
- (10) 「北清事変と広島病院(1)」によると、7月21日から9月7日（いずれも広島、宇品港到着日）の間に5回にわたり、博愛丸と弘済丸が交互にフランス兵合計122名（内2名はオーストリア兵）を広島まで輸送したことが記されている。「7月21日には博愛丸が37名、8月6日には弘済丸が21名、11日に博愛丸で57名、20日に弘済丸が2名、9月7日に弘済丸が5名の合計122名（内2名はオーストリー兵）を宇品に輸送しました。」
「彰古館往来」、陸自三宿駐屯地・衛生学校<シリーズ78>、「自衛隊ニュース」2008年8月15日号（http://www.boueinews.com/news/2008/20080815_9.html）。本史料との間に1回分のずれがある。
- (11) 本稿冒頭に掲示した諸拙稿参照。
- (12) 同上。
- (13) 原野昇「1900年に広島で治療を受けたフランス人兵士」、『仏蘭西学研究』35号、（2007年）pp.10-25.
- (14) 原野昇「広島における負傷フランス兵の待遇」、『仏蘭西学研究』36号（2010年）、pp.3-15.
- (15) 原野昇「負傷フランス兵広島で治療の経緯」、『仏蘭西学研究』35号（2007年）、pp.42-43.
- (16) クールジョールの肩書きとして日本側史料（戦史）では「海軍少将」となっているが、Amiralがそう訳されたものと思われる。いずれにしても将官であり、フランス側の現地最高責任者はAmiral Charles Louis Théobald COURREJOLLES（1842-1903）であった。
<http://www.comitequartiersaintpierreamiens.fr/543+amiral-courrejolles.html>参照。

page 6

Extrait

D'un rapport médico-chirurgical sur le Service de
Santé pendant les opérations militaires dans le
Tschibili. (Juin, Août.. 1900)



(図版1) 表紙ページ

I^{er} Renseignements sur l'évacuation des blessés au Japon.

Au point de vue de la possibilité d'évacuer nos blessés, nous étions en infériorité marquée sur les autres grandes puissances qui, presque toutes, avaient des possessions territoriales à proximité; Port-Arthur, un hôpital de Nagasaki, et Vladivostok pour les Russes; Tsintao, dans la rade de Kiao-tchan pour les Allemands; Wei-hai-wei, et un peu plus loin Hong-kong pour les Anglais; rien à dire des Japonais à deux pas de chez eux. Nous, par contre, notre seule ressource était l'Indo-Chine, et quelle ressource! qu'allaient devenir nos blessés, surtout nos grands blessés, débilités par les fatigues de la guerre, par la perte de sang, par des opérations graves, dans ce pays qui a raison des santés les plus vigoureuses et qui à cette époque de l'année (Juillet. Août) est particulièrement meurtrier? En ce qui me concerne ce n'est qu'à la dernière extrémité que je me serais résigné à l'évacuation sur Saïgon, certain ^{que j'étais} qu'elle équivaudrait pour des blessés graves, à un arrêt de mort. Je voyais je ne sais combien étaient émaciés, lamentables d'aspect, les troupiers qui en arrivaient? avant même qu'ils eussent mis a pied à terre, la mort avait commencé à faucher parmi ces malheureux dont beaucoup étaient partis malades, en sorte qu'on avait pu dire sans trop d'exagération que la Cochinchine avait mobilisé ses hôpitaux. Les navires qui les amenaient après
en

19世紀におけるフランス人宣教師の琉球滞在について

— 宣教活動と語学学習を中心に —

宮 里 厚 子

はじめに

西洋列強が日本の開国を待ち望んでいた幕末期の琉球王国には、日本入国への布石にしようと、その地政学的位置に目を付けた西洋各国の艦船が頻繁に寄港していた。そのような状況のなかで、琉球王国には1844年から1862年までに8人のフランス人宣教師が滞在した。具体的には、1844年の琉球王国初の滞留宣教師となるフォルカード (Théodore Augustin Forcade、1844年4月28日～1846年7月17日滞在) 上陸を皮切りに、ルテュルデュ (Pierre Marie Leturdu、1846年5月1日～1848年8月27日) とアドネ (Mathieu Adnet、1846年9月15日～1848年7月1日：那覇にて病死)、6年半の期間を空けてフューレ (Louis Théodore Furet、1855年2月26日～5月8日および1856年10月26日～1862年10月12日)、ジラルル (Prudence Séraphin Barthélemy Girard、1855年2月26日～1858年10月26日)、日仏修好通商条約締結の際通訳を務めることになるメルメ (Eugène Emmanuel Mermet、1855年2月26日～1856年10月30日)、ムニクー (Pierre Mounicou、1856年10月26日～1860年10月27日)、長崎で大浦天主堂の建築に関わり隠れキリシタンを「発見」したプティジャン (Bernard Thaddée Petitjean、1860年10月26日～1862年10月12日) の8人である。

その後の日本本土での活躍が知られている宣教師でも、彼らの琉球での滞在がどのようなものであったかはそれほど知られていないかもしれない。本稿では、これらのフランス人宣教師たちが残した記録を中心にみていきながら、彼らが琉球滞在中どのような状況にあり、どのような活動を行っていたのかなどを明らかにしつつ、その滞在にはどのような意義があったのか、ま

たその成果はあったのかということを検討したい。

1. 琉球王国における宣教活動

パリ外国宣教会から派遣された8人の宣教師たちは、日本再布教に向けてそれぞれ希望を持って琉球に向かったが、当時まだ中国に進貢する独立王国という体裁は取っていたものの、実際は薩摩や江戸の支配下にあった琉球においては、鎖国・禁教の時代であり、彼らは予想以上に困難な生活を強いられた。従って、宣教活動に関して成果はあったかという点に関しては、皆無であると言わざるを得ない。19世紀の琉球における最初の滞留外国人ということもあり、フォルカードはほぼ軟禁状態とも言える厳しい監視下に置かれ、住民との自由な接触は不可能であった。1846年にフォルカードと入れ替わりでやってきたルテュルデュとアドネは、フランス側の要請により少しは改善された環境で滞在することができた。フォルカードより自由に外出もできたが、やはり常に監視役がついていたため住民との接触は相変わらず困難であった。時折、監視の目を盗んで近寄ってくる住民と話すことはあっても、宗教の話題にまで会話を深めることはできなかったようである。ルテュルデュらと言葉を交わした老人が2日間投獄されるという出来事もあったため^①、慎重にならざるを得なかった。

ルテュルデュとアドネの宣教活動に関連して注目したいのは、同時期に琉球に滞在したイギリス人のプロテスタント宣教師ベッテルハイムの存在である。というのも、彼の宣教活動の方法がフランス人宣教師のいわば反面教師となっていたように思われるからである。ユダヤ系ハンガリー人であるベッテルハイムは、イギリスに帰化し、プロテスタントに改宗した人物である^②。1816年に英国海軍ライラ号艦長バジル・ホールとともに琉球にやってきたクリフォードという海軍士官がイギリスに戻った後、琉球に何らかの貢献がしたいという思いから1843年に立ち上げた「琉球海軍伝道協会」で牧師を募っていることを知り、応募・採用のうえ妻子とともに琉球にやってきた。1846年、偶然にもルテュルデュと同じ日に琉球に到着しており、入れ替わりとなるフォルカードにも会っている。ベッテルハイムも結果的には信徒を得ることはできなかったが、市場等で説教をしたり、宣教用冊子を配ったりすることに成功していた。これは性格によるところが大きいと言えるが、ベッテル

ハイムはいわば強引な性格で、自分の要求を訴えるためしばしば琉球王府に乗り込んでいくような人物であり、普段でも買い物のために市場につくと、監視役の制止も気に留めず、突然市場にいる人々を前に大声で説教を始めたという。

さらに、フランス人宣教師たちが住民と接触するのがほぼ不可能だった状態とは対照的に、ベッテルハイムはその大胆な性格以外にも住民と接触するのにいくつかの好条件を有していた。まず、彼には妻子がいたため、滞在する寺には西洋人の女性と子どもを見ようという人々が集まった。そうした機会をとらえ、住民に話しかけたり冊子を配ったりできたのである。さらに、彼は医師でもあったため、診療との目的で住民と接触できるという強みもあった。そもそも彼は医師という肩書で琉球入りしていたため、宣教目的だと上陸当初から認識されていたフランス人たちよりも監視が緩かったとも指摘されている。

そのベッテルハイムの宣教活動だが、記録によると彼は語学的能力に優れており、12か国語を話せたということから、琉球語の習得もフランス人たちより速く（これについては本人も、後述するようにルテュルデュらも認めている）、覚えたての言葉で早速布教を試みていたようである。ベッテルハイムはその日記の中で、「フランスのみなさんの琉球語に少しがっかりした」⁽³⁾とし、フランス人宣教師の目の前で市場にいる人たちに説教をした際には「我がフランスの友人たちは、私の琉球語についてよくやったと言ってくれた。また私には過分なほど、私の琉球語をほめてくれた」⁽⁴⁾と記している。しかし一方で「私が大衆に向かって説教をしているのに仏国人らが黙っていたのは、妙に気になるところだ」と続けている。これに関してはルテュルデュの日記を見みると理由がわかる。市場でベッテルハイムが説教を始めたとき、彼はアドネと顔を見あわせて「呆気にとられ、憤慨し、その場を離れた」⁽⁵⁾としている。日記の別の箇所では、ベッテルハイムについて次のようにも書いている。

彼は実際多くの言葉を知っており、彼の思考は素早くそれらを言い表す。しかし彼の発音は悪いようだ。我々の通訳たちが彼の言うことはほとんど理解できないと言う。従って、誰がこの不信心な地で最初に説教をするかというのは重要なことであろう。実際、彼の言葉に効果はなく、馬鹿にされるのがおちである。その上、どうやって彼は我々の教義を説明できるだろうか。我々は時宜

を得るにはほど遠いと考えている。⁽⁶⁾

このように、フランス人たちは琉球でキリスト教の教義を説教するには彼らの言語能力では時期尚早だと考えていたことがわかる。

さらにルテュルデュは、琉球での宣教は言語面の障害によるものだけでなく、相当な事態がない限り不可能だと感じていたことが同じ日記の記述から明らかである。

〔宣教が可能になる〕ためには、私の考えではふたつのことが必要である：一つは奇跡であるが、それも、すべての者に日の光よりもはっきりと見え、神が我々のもとにやってくるような大変重要な奇跡である。あるいは、さらに良いのは、外国の干渉による日本の勢力の停滞である。それがなければ、この国が改宗するという見込みはない⁽⁷⁾。

「外国の干渉」に関しては、さらに続けて考えを述べている。

もしかすると、神は自らイギリスかアメリカの大砲によって、我々に道を開く用意をしているかもしれない。もしそれ以外の方法で、宗教が日本に入れないのなら、そうなるがよい！⁽⁸⁾

ルテュルデュは、日本を開国に向かわせ、キリスト教が解禁になるためには、「外国の干渉」がたとえ武力的なものであるとしても仕方がないという立場をとっているわけだが、日本のかたくな現状が宣教師の努力の範囲を超えているということを痛感していたからこそ出てきた発言だといえるだろう。

このように、1840年代に滞在したフランス人宣教師たちは、監視や言葉の問題のせいで布教活動はほとんどできなかった。1855年から滞在した5人の宣教師たちにとっても、生活環境は徐々に改善されたものの、宣教活動に関する状況はほとんど変わらなかった。ごくまれに一般庶民と接触することができ、その中でも特に毎日顔を合わせる使用人にはさらにほんの少し宗教に関する話をするこゝもあつたことが宣教師たちの報告書に書かれている。一方で当局の方もそのような交流を防ぐために、これらの使用人を定期的に入れ替えるという策をとっていた。その中でもメルメはパリ外国宣教会の神学

校長アルブランに宛てた書簡⁽⁹⁾の中で、1856年に彼らの住まいで使用人をして琉球の22歳の青年を改宗し、1か月の準備期間を経た後クリスマスの夜にフランシスコ・ザビエルという名を与え洗礼を受けさせたと記している。しかしこれが彼の家族に知られ、その青年はその後二度と戻ってくることはなく、メルメは彼が「殉教したのだと信じて」いると手紙に記している。この青年が実際に処罰されたかどうかについては、琉球側の史料『琉球王国評定所文書』には記録が全く残っていないということである⁽¹⁰⁾。役人たちはこの一件をおおごとにしないために単にその青年を宣教師と接触禁止にしたか、もしくは、処罰したにせよ王府の公式な記録には残さなかったかのいずれかだと考えられる。

いずれにせよ、その青年が処罰されたと信じていた宣教師たちがかかなりショックを受けたことは事実である。琉球への上陸翌日の1855年2月27日、メルメは神学校の教師たちに宛てた手紙に、「我々は、我々の血をかけて、これら国民に信仰の宝を与えるのを嬉しく思うことでしょう」⁽¹¹⁾と宣教に対する誰より強い意志を表現していた。しかし、このような出来事を経て一年半の琉球滞在を終えるころには、メルメがこの地での宣教は「狂気」であると言っているとフューレの手紙に書かれており⁽¹²⁾、琉球宣教に対して次第に絶望感に襲われたと推測できる。ちなみに、同時期に滞在していたフューレやジラルールの文書からすると、メルメは激情型で、物事にのめり込みすぎるあまり周りを心配させるような行動をとることが多々あったことがうかがえる。青年を改宗した件に関しても、フューレらは慎重さに欠くとメルメの行動に批判的であった。

メルメはこうして失意のうちに琉球を後にし、日本に活躍の場を移すわけだが、一方で引き続き琉球に滞在したほかの宣教師たちは、その滞在記を見る限り、絶望的な暗い気持ちで日々を過ごしていたわけではないようである。1857年8月10日付けでムニクーが香港のパリ外国宣教会代表部のリボアに宛てた手紙には、宣教師たちは自分たちがかなりいい待遇を受けていると認識していることが明らかである。

我々は本当に甘やかされた子どものようです。大臣や府政官は年の瀬にプレゼントをしてくれました。我々は、この諸島を改宗するための神の摂理の時が訪れたときに宣教が当局から支援されるように、良好な関係を保つようにする

つもりです。どの当局者と話す時でも我々は、あれほど乱暴に彼らに無理強いされた気の毒な条約について言及することは細心綿密に避けており、その結果は悪くないといえます。⁽¹³⁾

ここでいう条約とは1855年11月24日に署名された「琉仏修好条約」のことであり、洪る琉球王府に対してニコラ・ゲラン提督が武力を持って無理矢理調印させた経緯がある。宣教師たちは、条約を盾に自分たちの権利等を主張して王府の役人の機嫌を損ねるようなことはしなかったわけである。

このように、宣教師たち各個人によって、そしておそらく滞在時期によっても、少しずつ考え方は異なるものの、キリスト教が禁止されている中で無理に布教活動をし、住民を危ない目に合わせたり自分たちの立場を悪くするよりも、琉球王府や薩摩の役人との間に波風を立てずに良好な関係を保ち、来るべき開国時に当局のお墨付きで宣教を行えるような環境を作っておくことのほうが得策と考えるようになったということがわかる。特に1850年代に滞在した宣教師たちは、すでにフォルカードやルテュルデュ、アドネら先人たちが獲得してきた滞在環境に満足し、あえて琉球王府に望むものもないという状況にもあった。また上述したように、彼らのつたない言葉（琉球語・日本語）でキリスト教の教義を説教するのは時期尚早だとの考えも一方ではあった。そこで、彼らはもはや琉球での布教よりも開国も近いと噂されていた日本での宣教活動を見据えて語学の習得に専念していたと考えられる。次の章では宣教師たちの語学学習に焦点をあてたい。

2. 宣教師の語学学習

これまで見てきたように、フランス人宣教師たちは、十分にキリスト教の教義を住民に理解してもらうにはある程度のレベルの語学力が必要だと感じており、布教がままならない状況のなか、語学学習を重要な日課の一つとしていた。もちろん、機会があれば住民に声をかけたり、琉球王府に宣教の許可を申請するなど、宣教の意志を完全に捨てていたわけではない。

フォルカードは、監視が厳しく語学教師もつけてもらえない生活を余儀なくされていたが、それでも2年間の滞在で琉球語を習得することに成功して

いた。ルテュルデュの報告書によると、24時間監視体制下にあった彼は、見張りの者たちのおしゃべりを盗み聞きしながら覚えたということである。

この人々は、笑い、好きなだけおしゃべりをした。彼らは、蕩々と無駄口をたたき、最初はそれが全く理解できなかったが、日に日に明らかになり、ついにすべて分かるようになった。六ヶ月も経つと、猥下はその言葉を知っていると胸を張って言えるようになった。⁽¹⁴⁾

さらに、残念ながら今ではその所在はわかっていないが、フォルカードは琉仏語辞典も編纂した。しかしながらフォルカードの大きな誤算は、自分の習得している言語が日本で話されている言語とは異なるものだと気づかなかったということである。『日本におけるキリスト教復活史』には、マカオから香港に行く船上で島原出身の日本人と出会ったフォルカードのエピソードが紹介されている。

私が彼から教わったことで特筆すべきことは、私が琉球で二年間に、教師も本もなしで、非常に苦勞して覚えた琉球の言葉は、要するに、日本のよくない方言で、日本の本島人には極めて理解しにくく、少なくとも滑稽な言葉であり、フランスの田舎の粗野な言葉がフランス・アカデミーの注意深い人には滑稽に思えるのと同じなのです。情けない発見でした。[…] 日本語の勉強は、[…]ろくに話しもできない悪意の人と琉球でなすべきではなかったのです……。⁽¹⁵⁾

フォルカードはこの頃、琉球に戻るかどうか迷っていたが、この日本人から日本語を習えることになり琉球には戻らないことを決意している。

フォルカードの到着から2年後に琉球にやって来た、ルテュルデュとアドネは、セシーユ提督の琉球王府との交渉の成果もあって、語学教師をつけてもらうことができた。しかし琉球や日本のことを知ろうと質問するルテュルデュらに、内情を知られまいと教師らが答えをはぐらかすため度々口論になっていたようで、教師を「やめさせ、20回替えた」⁽¹⁶⁾と書いている。また、教師たちは話し言葉を進んで教えようとはしなかったということだが、宣教師たちは話し言葉を習得し、特にルテュルデュは文字を学んだとして以下のように書いている。

私の方は日本の文字を少しならった。い、ろ、はで始まる47文字からなるアルファベット文字と中国におけるような表象文字という二種類の文字があることをご存知でしょう。[…] いろはに関しては、これは、いちばん単純で簡単である。しかしこれは、漢字より後に来たため、漢字より下に扱われ、メモを取るときにしか使われない。もし猥下が賛成なら、我々は本を書くためにこれを使うつもりです。こうすれば、子供達に至るまで皆、簡単に読み書きを学べるでしょう。⁽¹⁷⁾

19世紀の琉球において片仮名の使用は珍しいことではなかったが、日本本土に比べ、琉球では古くから公文書にも平仮名が多用されていたということ⁽¹⁸⁾や、後述のフューレの手紙で教師たちは片仮名があまり上手でないと書いていることなどから、ここで「いろは」をならったと書いているのは平仮名を指している可能性が高いと思われる。

アドネが病死し、ルテュルデュが琉球を去って以降、6年半の宣教師不在の時期を経てフューレ、メルメ、ジラルが琉球にやって来る。しかし、香港代表部のリボアが満州の同僚に宛てた手紙の下書きによれば、1855年に宣教師たちが琉球に来た時には、フォルカードの時のようにフランス海軍とパリ外国宣教会の利害の一致により海軍の船で宣教師を派遣するというような背景はなく、リボアが6か月かけてやっとフランス商船リオン号を見つけ、800ドル支払うことで実現したのである⁽¹⁹⁾。6年半というフランス人宣教師たちの琉球での空白期間にも、イギリス人牧師たちが継続的に滞在しており、フランス側にはプロテスタントによって琉球宣教が進められてしまうのではないかという焦りもあった。リボアがこの手紙の下書きを書いたとき、琉球のフューレからの第一報をすでに受けており、以下のように書いている。

今のところ、彼らにとって改宗者を得ることは難しいでしょう。というのも、住民には違反すれば重い刑に処されるものとして彼らと接触することを禁止されているからです。彼らが発信する前から私はそれを知っていました。従って彼らが今自らに目的として課しているのは、言語を勉強すること、生き生きとした声で[説教]できることを待ちながら生活の規則正しさと神聖さによって説教をすること、[…]⁽²⁰⁾

1844年当時セシーユ提督がフォルカードを琉球に連れてきた際には、日本と

の条約締結に向けて通訳を務めさせるという名目があり、語学学習自体も宣教師たちの（少なくともフォルカードの場合）当初からの滞在目的の一つであった。リボアの文書によれば、1855年以降の宣教師たちの滞在は、宣教活動のいわば代替として語学学習にますます重きを置いたものになったことがわかる。

上のリボアの手紙の内容を裏付けるように、1855年4月にジラルが書いた手紙には、「私たちはなるべく多くの時間を語学の学習に使うようにしています。各自、琉仏語辞典とフランス語辞典の2つの辞書をコピーし、フランス語辞典に琉球語を訂正しながら付け足しています」⁽²¹⁾とある。ちなみに、ここでいう「琉仏語辞典」とは、フォルカードが編纂したものであると推測できるが、詳細は書かれていない。また、同時期にメルメが書いた手紙には、琉球語はそれほど難しくなく、1か月半の勉強で理解ができ、理解してもらえるようになったとしている⁽²²⁾。また、メルメは続けて、琉球ではほとんどすべての役人が中国語を話すため、中国語の学習が必要であり、同僚たちは一番若い自分が勉強し始めるよう急がしていると書いている。

フューレは同じ日付の手紙で、メルメが少々勉強熱心すぎることを心配しつつ、彼の上達が早いことに驚いている。⁽²³⁾ また、同じフューレの手紙には、「つまり、私たちはこちらで居心地よく暮らしています。語学教師が定期的に2日に一度やってきますが、善い人たちです」とあり、かなりの頻度で教師に来てもらい満足していたことがわかる。

その2年後の1857年8月10日付けでムニクーがリボアに宛てた手紙⁽²⁴⁾には、宣教師たちの語学学習の様子について、フューレが年のせいで覚えるのに苦労していることや、ムニクーが会話を理解し始めたが、授業ではジラルが先生の質問にすべて答えてしまうので自分がなかなか上達できない、などのエピソードが紹介されており、日常的な学習風景を垣間見ることができる。そしてムニクーも「我々は教師たちにはとても満足しており、彼らは熱意をもって我々を指導してくれる」と書いている。従って、これより10年前のルテュルデュラの時代に比べれば、教師たちとの信頼関係はかなり良くなっていたと言える。

ところで、語学教師に関してはフューレがレオン・ド・ロニーへ宛てた手

紙で詳しく書いている。1858年6月に書かれたこの手紙には、彼らには、9人の先生がいて6人が首里、3人が久米村から来ていたということである。首里の先生というのは、「国学」⁽²⁵⁾という王府の高官を養成する学校から派遣された教師ということで、日本語を担当していた。それに対して久米村というのは那覇の一地区だが、昔から中国系の移民の子孫が住んでいる一角で、国学より古くからある「明倫堂」というその地区の教育機関から中国語の先生が派遣されていたことを意味する。この二つの学校はライバル関係にあり、フューレの手紙に両者の違いが説明されている。

首里の学生たちは、琉球と日本で公的な教えの基礎をなしている正典（儒教の経典：五経）をこのような方法で読んだ後、日本語の本を好みのままに勉強します。ある者はたくさん読みますし、数冊しか読まない者もいます。書くことに関しては、彼らは一般的に平仮名か、または俗文を使い、いとも簡単にそして驚くべき速さで書きます。彼らは片仮名はあまり上手に書きません。職人や商人たちは俗文を使います。

那覇の町はいくつかの地域に分かれています。その一つが我々の住んでいる久米村です。東に位置していますが、中国語を話し、中国語の本を読み、角ばった字しか書かない中国人しか住んでいません。彼らは俗文も日本語の仮名も知りません。彼らの地区の真ん中に広大な学校があり、首里の学校とはかなり違った教育をしています。これが中国語学校または久米村の学校です。⁽²⁶⁾

また、教師たちの能力についても以下のように述べている。

久米村の先生たちは我々に教えている本を完全に理解していて、よどみなく説明します。首里の先生たちはそうではありません。彼らは、自分たちの母国語で書かれているにもかかわらず、前もって長い時間準備しておかないと彼らの日本語の教科書を我々に説明することができません。⁽²⁷⁾

さらに、1858年11月にジラルがパリ外国宣教会の教師たちに宛てた手紙には、語学の上達具合について、彼らがすでにはかの宣教師に教えられるほどのレベルであることが書かれている。一方で日本が開国した後は日本人にフランス語を教える意欲も見られる。

もちろん、語学の学習に関しては日本本土で琉球と同じような有利な条件を見つけられるかどうか確かではありません。しかし、我々4人はそれぞれすでに新しい同僚の教師になることができますし、いったん開国すれば言語に何らかの便宜がないということはありませんでしょう。日本人たちはきっとフランス語をいちばんに習いたがるでしょう。⁽²⁸⁾

宣教師たちはそれぞれ1年半から長い者で6年ほどの琉球滞在で日本語、琉球語、中国語を学習し、後の日仏交流史のなかで周知となるように、辞書の編纂や通訳の役割をこなすほどの語学力やその基礎を培った。初期に滞在したフォルカードやルテュルデュ、アドネにとって、その生活環境同様、語学の学習環境は琉球王府と時には口論を交わしながら整えてきた経緯がある。その後フランス海軍側の介入もあり宣教師の滞在環境が整ってくると、宣教活動に関しては望み通りにいかなかったものの、語学学習に関しては非常に満足度の高い環境を与えられていたことが、宣教師たちの記録から読み取れる。琉球王府側にとっても、語学教師を派遣することで宣教師たちが何の揉め事も起こさず、満足して語学学習に専念してくれれば、これほど好都合なことはなかったであろう。

まとめ

19世紀後半、8人の宣教師たちは、東アジアに商業的・軍事的拠点を求めていたフランス海軍の協力を得て琉球に上陸を果たし、日本再布教への希望を抱いて滞在生活を始めた。しかし宣教活動は、琉球王府と薩摩の役人の厳しい監視のもとで困難を極め、その成果は無に等しいものだった。宣教活動どころか、一般住民との接触さえ難しい状況において、琉球布教への希望は次第に日本本土再布教の時機を待つ姿勢へと変化していったと言える。一方で宣教師たちは、もともと地元の言語を十分に習得しなければキリスト教の教義を伝道することは難しいと考えていたため、宣教活動ができない分、語学学習に自らの滞在意義を見出し最大限の時間を使っていたということを彼らの手紙や報告書から明らかにすることができた。また、宣教師たちの文書からは、彼らのおかれていた時期にあえて宣教活動をして危険を冒すよりも、開国が近いと噂される日本の再布教に備え、琉球王府や薩摩の役人、派遣される語学教師たちと良好な関係を保ちながら、語学学習に専念するほうが立

場上賢明であると考えていたこともわかった。8人のフランス人宣教師たちの琉球滞在は、宣教活動の成果こそ得られなかったものの、語学の習得に関しては本人たちも満足する学習成果があり、うちメルメやジラル、ムニクー、プティジャンらに関しては、後の彼らの日本本土での活躍が日仏交流史に顕著な足跡を残したことは周知の通りである。

* 本稿は、2016年11月の日本仏学史学会第477回月例会の発表内容に加除訂正を加えたものである。

* 本稿を執筆するにあたって、フランス国立科学研究所名誉研究ディレクター・パトリック・バイヴェール氏が翻刻したパリ外国宣教会古文書のうち未公刊の資料も使用させていただいた。資料提供に対し感謝いたします。

(注)

- (1) 「私が天にまします主について話すのを聞いたある哀れな老人は、そのために、2日間投獄された。」「1846-1848年の沖縄滞在に関するルテュルデュ神父の『報告書』第一部』『フランスにおける琉球関係資料の発掘とその基礎的研究』（平成9-11年度科研費研究成果報告書：研究代表者 赤嶺政信）琉球大学法文学部、2000、138頁。パリ外国宣教会古文書（以下、AMEP）vol.568:511-575のパトリック・バイヴェール氏翻刻、拙訳。138頁。
- (2) ベッテルハイムに関しては、照屋善彦『英宣教医ベッテルハイム—琉球伝道の九年間—』（英語による博士論文）山口栄鉄・新川右好訳、人文書院、2004年参照。
- (3) 同上、63頁。
- (4) 同上、69頁。
- (5) 「ルテュルデュ神父の『琉球（沖縄）日記』』『フランスにおける琉球関係資料の発掘とその基礎的研究』、108-109頁。AMEP vol.568:348-372のパトリック・バイヴェール氏翻刻、拙訳。
- (6) 同上、103頁。
- (7) 「ルテュルデュ神父の『報告書』第一部」、138頁。
- (8) 同上、141頁。
- (9) フランスシスク・マルナス『日本キリスト教復活史』久野桂一郎訳、みすず書房、1985年、142-144頁。
- (10) 恩河尚「『異国船御用掛日記』解題」『琉球王国評定所文書第十二巻』浦添市教育委員会、1996年、333-336頁。
- (11) 『日本キリスト教復活史』、129頁。
- (12) « M. Mermet regarde la mission de Lou-tchou comme une folie. » Lettre de Furet à Libois, procureur des Missions étrangères à Hong-kong (Naha, 29 octobre 1856), AMEP 569. [パトリック・バイヴェール氏翻刻]

- (13) Lettre de Mounicou à Libois (Naha, 10 août 1857), AMEP569. [パトリック・ベイヴェール氏翻刻]
- (14) 「ルテュルデュ神父の『報告書』第一部」、132頁。
- (15) 『日本キリスト教復活史』、112-113頁。(1849年9月18日付、パリ神学校の教師宛て)
- (16) 「ルテュルデュ神父の『琉球（沖縄）日記』」、124頁。
- (17) 同上。
- (18) 琉球における文字の使用に関しては高良倉吉『琉球王国の構造』（吉川弘文館、1989）参照。
- (19) « Après six mois de recherches inutiles, je trouvai enfin un navire français, le Lion, capitaine Bonnet, qui consentit à conduire trois missionnaires et un domestique à Napa-Kiang, port de la grande Lou-tchou, à condition de \$ 800 ; c'était bien cher, mais il n'y avait pas moyen de faire autrement. » Brouillon de lettre de Libois à Mgr. Verrolles, vicaire apostolique de la Mandchourie (Hong-Kong, 27 août 1855), AMEP Libois. [パトリック・ベイヴェール氏翻刻]
- (20) 同上。
- (21) Lettre de Girard à Libois (Tomari, 24 avril 1855), AMEP 569. [パトリック・ベイヴェール氏翻刻]
- (22) Lettre de Mermet à Tesson, directeur au séminaire des Missions étrangères (Tomari, 25 avril 1855), AMEP 568. [パトリック・ベイヴェール氏翻刻]
- (23) Lettre de Furet à Libois (Tomari, 25 avril 1855), AMEP 569. [パトリック・ベイヴェール氏翻刻]
- (24) Lettre de Mounicou à Libois (Naha, 10 août 1857, AMEP 569.
- (25) 琉球王国には、高官を養成する教育機関としてすでに久米村の「明倫堂」が存在していたが、15世紀以降王府高官が久米村出身者で独占されていたため、階級打破の実現を目指した尚温王によって、1798年首里に「国学」と称する新たな教育機関が設立された。どちらの学校も四書五経などを教科書として用いていた。(中山盛茂編著『琉球史辞典』、文教図書、1978年参照)
- (26) «Les Lettrés de Lou-tchou» (Naha, 1er juin 1858), AMEP569, lettre publiée dans *Lettres à M. Léon de Rosny sur l'archipel japonais et la Tartarie orientale, par le P. Furet, missionnaire apostolique au Japon, membre correspondant de la Société d'ethnographie*, Paris, Maisonneuve & Cie, 1860, pp.3-21. (パトリック・ベイヴェール編『西洋の出会った大琉球 第二期:第2巻』Curzon, Edition Synapse, 2002に所収)
- (27) 同上。
- (28) Lettre de Girard aux directeurs du séminaire des Missions étrangères (Hong-Kong, 13 novembre, 1858), AMEP 568. [パトリック・ベイヴェール氏翻刻]

「*Choix de lectures françaises* シリーズ」における

地方主義の描写

中 村 能 盛

1. はじめに

マリア会日本管区の修道士であり暁星学園のフランス語教師であったジョゼフ・ヴェルニエ (Joseph Vernier)⁽¹⁾が、著作者及び編集者となり、初級、中級、上級の3種類で構成された講読教科書「*Choix de lectures françaises* シリーズ」の中級に相当する *Cours moyen* にはジョゼフ・ヴェルニエが執筆したオリジナルテキストと、抜粋の体裁で主として17世紀から19世紀迄のフランス文学作品を掲載していた⁽²⁾。

しかしながら *Cours moyen* には唯一、20世紀に入って刊行された作家ルネ・バザン (René Bazin) の *La douce France* が掲載されていた。1900年代から1910年代にかけてフランスの文壇では、ロマン・ロラン、モーリス・バレス、ポール・クロデル、アンドレ・ジッドが作品を発表し続けていたが、ジョゼフ・ヴェルニエは上述の作家の作品を「*Choix de lectures françaises* シリーズ」に掲載する事がなかった。

本稿ではジョゼフ・ヴェルニエが、「*Choix de lectures françaises* シリーズ」の紙面で、20世紀のフランス文学作品からルネ・バザンの作品だけを掲載していた事象に着目し、ルネ・バザンの作品とジョゼフ・ヴェルニエが *Cours moyen* で執筆したオリジナルテキストとの比較考察を行い、両者の関連性を見出したい。

2. ルネ・バザンと『やさしいフランス』について

ルネ・バザンの略歴については「[...] 文学へのデビューは1880年ごろから

で《両世界評論》誌などの雑誌に寄稿していたが、『インキの汚点』*Une tache d'encre* (1888), 『シシル』*Sicile* (1893) の2小説がアカデミー・フランセーズ賞を得て文壇に認められた。[...] 自然に強い興味をいだき、農民、労働階級者などの田園生活を多く描写していた。それゆえ、彼の作品にはいかにもフランスの伝統的な素朴な郷土色豊かなものが多い。[...] ⁽³⁾」と記載されている。

19世紀から20世紀前半にかけて、フランスの著名な作家たちは活動地域がパリに一極集中していた時代であった。そのような状況下で、ルネ・バザンは小説を執筆する際にフランスの地方を精密に描くため、地方都市へ滞在して、取材を行っていた。

そして1930年代に国内で刊行されたルネ・バザンの翻訳作品には、「[...] 彼の現実描写は、青年時代からの影響によって自然への渴仰から、都会生活よりも田園生活の自然描写に多く力点を注ぎ、質朴粗野な農夫、労働者などを多く題材としたのである。従って彼は地方主義的作家と呼ばれる。[...] ⁽⁴⁾」と記載されていた。

上述の文献によれば、ルネ・バザンが描いた作品は、郷土色が強く地方主義的傾向という事が伺える。地方を題材にして小説を執筆していたルネ・バザンが教育機関用の教科書を執筆したのは何故か。『やさしいフランス』(*La douce France*) の序文に記載された内容を確認したい。

Voici comment ce livre est né. Au mois d'août 1909, l'Alliance des maisons d'éducation chrétienne tenait, à Nancy, sa trente-deuxième assemblée générale. Elle s'occupa, parmi d'autres questions, des livres de lecture courante en usage dans les écoles, fut d'avis qu'il en fallait de nouveaux, et voulut bien m'inviter expressément à en écrire un. J'ignorais tout à fait le vœu qui me désignait ainsi. Il me fut communiqué quelques semaines plus tard. J'avais d'autres projets, d'autres travaux en cours. Il me sembla que je ne trouverais pas de temps pour celui-là. Et je refusai d'abord. J'avais tort. Je réfléchis, et je ne me sentis plus soutenu par ces raisons que j'avais crues suffisantes. [...] Bientôt je n'hésitai plus. Oui, j'écrirais pour les écoliers de France. Je leur dirais ce qu'est l'âme de ce pays, son caractère, sa vocation, son visage de nation. Le titre allait de soi. Ce serait *La Douce France* [...] ⁽⁵⁾

1909年にルネ・バザンは、アリアンス・キリスト教育学校に教科書の執筆依頼を受け、当初は断ったものの、フランスの国の特色、精神、等を小学生達の為に学習させる為に『やさしいフランス』という書名で教科書の執筆を引き受ける事となった。目次には「フランスの農民」(*Le paysan de France*)、「耕す人」(*Le Laboureur*)、「クリスマス」(*Noël*)、「アルザスの牛たち」(*Les bœufs d'Alsace*)、「粉屋」(*Le meunier*)などが記載され、全部で53作品により構成されている。いずれも2ページから長くとも15ページ程度の掌編、または短編が掲載されており、テキストを確かめてもルネ・バザンは、自身がそれまでに執筆した物と同様に、地方主義的な傾向の作品を執筆した事が伺える。

3. ルネ・バザンとジョゼフ・ヴェルニエによる作品の比較考察

ルネ・バザンが執筆した「多彩なフランス」(*La France est variée*)と、ジョゼフ・ヴェルニエが*Cours moyen*の紙面に掲載した「フランス」(*La France*)の両作品を比較考察する。

「多彩なフランス」における冒頭の描写を確かめたい。

Les paysans sont la forte infanterie des nations et les ouvriers seraient plutôt la cavalerie légère. Les paysans se remuent lentement, ils ont la patience, l'endurance, et, dans la France tout au moins, ils sont le nombre, l'élément principal de la population. Mais vous devinez bien que dans cette armée il y a beaucoup de régiments, qui n'ont ni le même uniforme tout à fait, ni les mêmes qualités dans le travail de chaque jour. [...] Prenez une carte de géographie ; tirez une ligne du nord au sud, de Cherbourg par exemple, à la frontière des Pyrénées. Que trouvez-vous ? D'abord la Normandie, pays d'herbages et de pommiers. La seule présence du pommier indique la qualité du climat et celle du sol. Car le pommier n'est pas un bonhomme d'arbre de robuste santé, comme on le croit, et qui se plaît partout, et qui produit chaque année des pommes. Quelle erreur de citadin ! C'est un délicat, au contraire, un difficile, un capricieux ⁽⁶⁾.

最初の文章からフランスの農民を描写し、まるで首都パリを回避するかの

ように次にノルマンディー地方の風土を描写する。そしてルネ・バザンは都会の人々を批判する内容を書き綴っている。物語は他にもアンジェ地方の田園風景、ランドの松林などを描写している。地方、郷土を舞台にした作品を好むルネ・バザンはパリ、芸術、モードなどについては、この作品では言及しなかった。

ジョゼフ・ヴェルニエが執筆した「フランス」では、フランスの国内についてどのように描写をしているのだろうか。作品の冒頭部分を確認したい。

La France est un des grands pays de l'Europe. Elle est bornée, au nord, par la Manche et la Belgique ; à l'est, par l'Allemagne, la Suisse et l'Italie ; au sud, par la Méditerranée et l'Espagne ; à l'ouest par l'océan Atlantique. La France offre un aspect très varié. Au nord, la contrée est plutôt plate, entrecoupée par d'agréables collines ; tandis qu'à l'est, elle est hérissée de hautes montagnes. La frontière, de ce côté-là, est presque uniquement composée de chaînes de montagnes : les Vosges, le Jura et les Alpes. L'ouest présente les belles plaines de la Touraine que l'on a surnommées "le Jardin de la France." Tout à fait à l'extrémité, en Bretagne, le pays est rude et couvert de bruyères stériles. Au sud-ouest, le long de la mer, on rencontre également de vastes terrains incultes : ce sont les Landes. Mais le reste du Midi est très fertile. Les oliviers et les orangers y poussent comme dans les pays chauds, et les coteaux sont couverts de riches vignobles qui font de la France le premier pays vinicole du monde.
[...]⁽⁷⁾

ジョゼフ・ヴェルニエは最初からフランス全体を鳥瞰し、アルプス山脈、ブルターニュ地方を作品に登場させている。その一方で「パリは政府の本拠地で国の首都。[...] フランス人は自由への愛、文学と芸術のセンス、礼儀正しさで有名⁽⁸⁾」とパリおよび、芸術、文化についてはわずかばかりの描写にとどまっている。

アルザス生まれのヴェルニエは、首都や芸術ではなく、地方と地方の編み出した文化を中心に描き、広域的にフランスを概括したかったのではないだろうか。

アルザスまたはフランスの地方を、ルネ・バザンとジョゼフ・ヴェルニエは掌編作品の中で、どのように描写しているのだろうか。

次にルネ・バザンの「ドイツ人の軍事行動」(*Aux manœuvres allemandes*)と、ジョゼフ・ヴェルニエの「大胆な奇襲」(*Un hardi coup de main*)の内容を比較考察する。

バザンの「ドイツ人の軍事行動」は、『多彩なフランス』のアルザスに関する物語の1編として掲載された掌編作品である。

物語はアルザスのC町を舞台に独仏戦争後、フランスとドイツ間が緊張状態に置かれた場面から始まる。主人公のDはドイツへ旅立つが、道に迷いドイツ軍兵士に道を訪ねる。

[...] Mon ami s'approcha de lui, et l'interrogea, en allemand. La sentinelle répondit en français :

—C'est pas difficile, allez ! Vous n'avez qu'à monter le petit raidillon, en face, et vous verrez les premières maisons, à un kilomètre. Il y a un sentier.

—Comme vous parlez bien le français!

—Pas étonnant !

—Pourquoi ?

—Nous sommes du pays.

—D'où êtes-vous ?

Le soldat vit que ses camarades l'observaient. Il reprit sa marche, en disant, du coin des lèvres :

—Metz ! Allez-vous-en ! [...] ⁽⁹⁾

語り手は この2人の会話の後に、「私達はフランス人だという言葉、子供たちに理解して欲しい」と叙述する。そして併合されたロレーヌ（当時、ドイツの支配下）には未だにフランスの愛国心を持つ人々が、国境近くに存在する事を説明して物語は終わる。

次にジョゼフ・ヴェルニエの「大胆な奇襲」を考察したい。第1次世界大戦の1914年から1918年のドイツとフランスの戦いを元にして執筆された作品で、C大佐がドイツ軍の勢力を把握するため、フィリップ伍長を現地に派遣させる場面から物語が始まる。

[...] Philip recrute vingt-cinq volontaires aussi courageux que lui, et la petite troupe part. Arrivé près de la crête, Philip aperçoit des soldats du génie

allemand creusant une tranchée [...]

“Wer da ?”crie l'Allemand.

A ce moment le compagnon de Philip remue sa baïonnette dans le fourreau. La sentinelle se retourne vers la gauche. Philip profite de ce moment pour bondir sur l'Allemand ; il lui plante sa baïonnette dans la poitrine et saisit son fusil. La sentinelle tombe sans pousser un cri. Vite, Philip, sans être vu des soldats allemands qui travaillaient à vingt mètres plus loin, prend le manteau, le casque et le fusil de la sentinelle et se met à monter la garde à sa place. Bientôt, la tranchée étant finie, les soldats du génie allemand partent pour aller en arrière avertir l'infanterie que la tranchée est prête. Ils adressent en partant un salut amical à la sentinelle qui, à leur grand étonnement, continue sa promenade sans leur répondre. [...]⁽¹⁰⁾

フィリップ伍長の一団が山に到着するとドイツ人兵士達と遭遇した為、ドイツ人兵士を銃剣で殺める。その後、フィリップ伍長がドイツ人上官の変装をして、ドイツ人の兵士に退散を命じて、塹壕をフランス軍が占領する場面で物語は終わっている。

4. おわりに

「フランスは多彩」と「フランス」を比較考察した結果、フランスの首都ではなく地方を強く描写した事が共通項として浮上した。そして「ドイツ人の軍事行動」と「大胆な奇襲」の比較を通して、ルネ・バザンとジョゼフ・ヴェルニエは同時代にフランスとドイツとの係争地域を舞台にした作品を執筆していた事を解明した。

本稿の分析から、ジョゼフ・ヴェルニエが*Cours moyen*でフランスの自然や地理をテーマとして執筆したオリジナルテキストに関しては、フランス文学作品と対比すると、地方主義的な作風を帯びたのだと認識できるであろう。

注

- (1) ジョゼフ・ヴェルニエの経歴については、マリア会日本管区『マリア会日本渡来八十年』、マリア会日本管区出版部、1968年、pp.564 - 573を参照されたい。
- (2) 拙論「暁星学園刊行Choix de lectures françaises cours moyenの分析―講読教科書の改版に潜む謎―」『日本フランス語フランス文学会中部支部 研究報告集No. 38』 pp.1-24。
- (3) 日本フランス語フランス文学会編『フランス文学辞典』白水社、1974年、pp. 533-534。
- (4) ルネ・バザン『ルネ・バザン短篇選集』萩原弥彦訳、中央書院、1936年、p. 289 旧字体ではなく新字体に変換して表記した。
- (5) René Bazin, *La Douce France*, J. de Gigord, Paris, 1911、序文。
- (6) *La Douce France*, p. 6.
- (7) *Cours moyen*, 第14版(1974年)、pp. 88-89.
- (8) Ibid, pp. 88-89.
- (9) *La Douce France*, p. 112.
- (10) *Cours moyen*, 第9版(1922年)、pp. 62-64.

ギヨーム・クールテ ―日本に初めて来航したフランス人―

市川 慎一

はじめに

まず、これからの話を大きく二つにわけたいと思います。

最初に、クールテ神父ゆかりの地セリニャンについてわたしが見てきたことなどを話します。次に、文献によってクールテ神父像を浮き彫りにしたいのですが、うまくできるかどうか自信のほどはたしかではありません。

さて、わたしはフランス政府給費留学生として1966年から69年にかけて、モンペリエ大学（現在は、ポール・ヴァレリー大学）で研究生生活を送る機会に恵まれました。その後、何回となく古巣のモンペリエを訪れておりますので、それがいつのことだったのかははっきりとしないのですが、ある時、モンペリエ時代の恩師ジャック・ブルースト教授のご自宅に招かれました。その時に、皆様のお手元のレジユメにも書きましたように、ギヨーム・クールテの生地に「巡礼」に来る日本人が多数にのぼるということを教授がわたしに話されたことがあります。さらには、教授が1997年に出版されたご著書の中でも、こう述べておられます。

「クールテはドミニコ会士で、ベジエ近くのセリニャンに、1589年もしくは1590年に生まれた。彼はいくつもの難しい外交問題で、とくにスイスのグラウビュンデン州やヴァルテルリーチ（イタリア北部コモ湖北の谷、戦略上の要衝）において、リシュリユーの下で交渉にあたった。ついで、フィリピンに行き、スペイン人布教団に加わり、そこでトマソ・デ・サント＝ドミンゴの名で知られた。そして、彼は日本において1637年に捕らえられ、殉教した。セリニャンには彼の記念碑が建てられていて、今日なお、日本のキリスト教徒たちが巡礼にやってくる。」と書かれています⁽¹⁾。（ジャック・ブルースト著、

山本淳一訳『16-18世紀ヨーロッパ像—日本というプリズムを通して見る』岩波書店、1999年刊、p.4。原書のタイトルは、まとめて文末の注に掲げる。以下同様)。ジャック・ブルーストの著書については、最後の方でも再び取り上げます。

18世紀の百科全書研究の大御所、ブルースト教授の口からクールテとセリニャンの話が飛び出したのには驚きましたが、それ以前には、日本では日本仏学史学会第三代会長故富田 仁氏（1933～2009）が、1974年8月24日に、クールテゆかりのセリニャンを訪れたとご著書の中で書かれていましたので、わたしは長崎で殉教したクールテのことを知っていました。（富田仁著『仏蘭西學のあけぼの—仏學事始めとその背景—』、カルチャー出版社、1975年刊、p.81）

セリニャンはモンペリエからは近いところなので、いつか行けるだろうと簡単に思っていたのですが、その機会はなかなかやってこず、2012年になって、この講演の下準備のため、5月の末にやっと現地へ赴くことができたのです。故富田氏の訪問から、はやいもので38年が経過しています。

その間、他の日本人で「セリニャン詣で」に行かれた方は、キリスト教徒だけではなく、一般の人たちもかなりの数にのぼるようです。わが日本仏学史学会からは、五代目会長を務められた滑川明彦氏が現地を訪ねておられます。また、いまから13年前には、京都放送局のスタッフが現地取材に訪れ、ピアニストの中村幸代さんがパイプオルガンで演奏会をされた記事が地元紙「Midi Libre」に載っています。



ピアニスト中村幸代さんと京都テレビ局スタッフのセリニャン表敬訪問を報ずる地方紙「ミディ・リーブル」（1999年6月19日付）

さて、かなり後れて現地入りしたわたしには、富田氏の現地訪問以来、セリニャンとその教会をめぐり、何か新しいことがおきているか、あるいはその反対で当時と何一つ変わったことがないのか、東京ではセリニャン情報が得られませんでした。いささか不安な気持ちでパリからモンペリエまで飛行機で飛び、古巣のモンペリエで一泊した翌日、すなわち2012年5月27日午後、車でセリニャンを目指しました。

モンペリエから隣り町のベジエ方面へ向かうわけですが、道路標識に従い

ベジエまでは、快調に進んだものの、ベジエに入ってから、あちこち走りまわっても、セリニャンの道路標識はなかなか現れません。車を運転してくれているルワンダ人の友人が通行人に道を尋ねると、Villeneuve Les Beziers方面に向かうとセリニャン標識にぶつかるということでしたが、Villeneuve Les Beziers標識に出会うまでにかなり無駄な時間をつぶすことになりました。それにしても、セリニャン方面の道路は、車が込み合っていました。

はじめ、翌日は、ペンテコステ[=聖霊降臨]にあたるので、車の往来がはげしいのだろうくらいに思っていたのです。現地に来て見てわかったことは、セリニャンは現在ではクールテゆかりの教会で知られているのですが、別の理由で観光客が押しかけることもわかりました。それは、近くにSerignan-Plageという海岸があって、こちらの方はtoplessの若い女性がいるので、ドイツ人やオランダ人の男性に人気があるということでした。

I 日本仏学史学会第三代会長、故富田仁氏訪問後のセリニャン

- 1) クールテ神父の生家（現在住んでおられる人は、クールテ神父とは無関係とのことです）を訪ねますと、中から高齢の夫人が玄関に出てこられました。夫人と旧知のセリニャンの「クールテ友の会」会長のアンリ・ルブール Henri Reboul氏が案内役を務めて下さったので、夫人に改めて来意を説明せずにすみました。氏は聖職者ではなく、モンペリエ大学理学部で物理学を教える教授です。わが国では理系の教授がこのような職を兼ねるといのはめずらしいことかもしれません。この点をフランスで古くからの友人に質したところ、フランスでは決してめずらしいことではないと一蹴されたことを思い出します。



ギョーム・クールテの生家とされる入口と現在の住人〔夫人のお名前等は未詳〕とアンリ・ルブール氏

富田論文の冒頭で、クールテの「両親は貴族で金持ちであった」（前掲書p.84）と書かれていますが、この情報源はジュール・クールテの伝記であろうと思われます。長らくクールテの生家の所在は、はっきりしていませんでした。その重要な目安として地下室caveのある家を探したようです。するとこの家にcaveらしきものがあったので、その生家らしき家屋

と隣家の下の壁にある覆いをはがすとcaveの穴が出てきました。これが、クールテの生家の証拠であると夫人は説明してくれたのです。

ところが、夫人の話すフランス語は地方なまりが強く、南仏なまり accent du Midiに慣れているはずのわたしでしたが、夫人の話すフランス語を半分くらいしか聞きとれませんでした。聞き間違いかと思い、夫人のいわれたcaveはどのような役割をはたしていたのか同行のルブール氏に尋ねますと、現在とちがい、同じ一定の温度の保てる地下のcaveに、昔はゴミを捨てていた。つまり「ゴミ捨て場」でもあったという説明をいただきました。

- 2) 故富田氏がお会いになったジョゼフ・エストゥルネ Joseph Estournetは、『聖ギヨーム・クールテ』⁽²⁾と題された小冊子を出されています。フランス語版があるのは当然としても、現在では英語版、ドイツ語版に日本語版まで刊行されているのです。つまり、クールテの殉教を世界中の人たちに知ってもらうために各国語版が用意されているわけです。おそらくはエストゥルネが責任者であった時代にはなかっただろうと推測しますが、いまではクールテ神父を顕彰する協会 APAPEC、つまり、先ほど言及しましたクールテ友の会ともいべき親睦会が設立されていて、立派な事務所ができていました。そこにも日本語版パンフレットがありました。

- 3) その後、1981年には、マリア会神父ビエール・アンベルクロードの評伝⁽³⁾が出版されて、富田氏はおそらくは見ておられないのではないかと思いますので、第二部ではその中身の一部を紹介したいと思います。

わたしの講演の司会をお引き受けくださったマルケ氏が編集された本、つまり日仏交流に詳しかった二人のフランス人、アンリ・ベルナルやアンベルクロードの業績を再録された論集ですが、その序文で「なるほど、キリシタン時代にはフランスはごく限られた位置しか占めないけれども、江戸時代にはその位置は皆無ではなかった」⁽⁴⁾と指摘されています。広義の日欧交流という視点からいいますと、フランス人の存在は、イベリア半島のポルトガル・スペイン人と比べると見劣りがするかもしれません。とはいえ、両人の研究は、コピー機もパソコンもなかった時代によくもここまで調べられたと驚くような充実した内容になっていて、読んでいると、そこはかとなき感動を覚えます。

第二部では、故富田氏やアンベルクロード氏がマニラ経由で日本の地を踏んだクールテ神父について書かれていることをここで蒸し返すだけでは意味がありません。そこで、先行の研究者がおそらくは目をとおされることがなかったと考えられる文献をこれから若干紹介したいと思います。

富田・アンベルクロード両氏も、クールテ神父はフィリピンのマニラを経て、沖縄に潜入した、と書かれています。つまり、当時、スペインのドミニコ会修道会があるマニラで日本情報を収集しただけではなく、自らの氏名までスペイン語風に改め、スペイン人修道僧になりすまして、琉球の地を踏んだのでした。

ところが、アンリ・ベルナルの諸論文はクールテをテーマにしていませんので、ここでは直接ふれません。富田論文でもアンベルクロードのクールテ評伝でも、こうした国際情勢についてはごく簡単に語られているだけです。それに反して、長らく中国に滞在したイエズス会士、アンリ・ベルナルは、マカオやフィリピンを介した日仏交流について、当時、入手可能な内外の文献を精査されて、見事な論文を数々発表されています。

そこで、ここでは、先行の論文にふれられていない何か新しい史実を紹介するために、当時スペイン王国の副王領に属していたフィリピンとわが国の関係を駆け足で見えてゆきたいと思います。

ここで急いでお断りしておきますが、カトリック修道会についての出来事は、歴史的な事柄を紹介するだけで、現代のカトリックのあり方とは無関係であるということです。

さて、植民地司法官兼行政官としてフィリピンに着任し、8年も現地に滞在したモルガ(『フィリピン諸島誌』初版(1609)^⑤、岩波書店、1966年刊、p.366 / p.448)によりますと、スペイン人レガスピによるフィリピン諸島の征服は、1564年にはじまり、彼に同行したアウグチノ会士4人がはやくも翌年(1565年)にはキリスト教の宣教活動を開始したと書かれています。この修道会に続いたのはフランシスコ会で、1577年のことでした。さらにザビエルの鹿児島到着(1549年)で知られるイエズス会士のマニラ到着は、1581年で、クールテ神父の所属したドミニコ会士の到着は一番遅く、1587年ということです。

富田論文では、極東における布教について、「フィリピンはドミニコ会に委ねられていたので、ギョーム・クールテ神父はイスパニア(現在のスペイン)の修道会の仲間に加わったのである」(前掲訳書p.87)と書かれ

ていて、フィリピンではドミニコ会が日本布教を独占していたかのような印象を与えますが、他の修道会もマニラからわが国を目指していたわけですからこのように指摘するのは正確性を欠くでしょう。

さらに、マニラ＝アカプルコ（当時のヌエバ・エスパニャ、現在、メキシコ）を結ぶガレオン船が頻繁に航行するようになると、船の事故も頻発します。有名なのはサン＝フェリーペ号事件（1596＝慶長1年）で、1596年に土佐沖に漂着しました。舵を失ったサン＝フェリーペ号が日本に漂着せざるをえなかった一部始終がモルガにも詳述されています（同p.107）。秀吉の命令で日本側に積み荷も所持金もすべて奪われるとの悲報は、翌年1597年にはいち早くマニラのスペイン側に伝わっています（同p.113）。

フィリピンについてもそうでしたが、カトリック教の世界が、どうして、こういくつもの修道会にわかれているのか、わたしは常日頃、不思議に思っているのです。アンベルクロードの本でも日本での布教活動の長いイエズス会は、後発のフランシスコ会やドミニコ会の渡日を妨害しようとしたとして、キリスト教修道会同士の内輪もめがあった、と書かれています。

遠藤周作『侍』でもフランシス会のソテロとイエズス会の対立が取り上げられています。カトリック修道会Congregationsにおける対立の原因のひとつは、いわゆるトルデシージャス条約（世界分割協定1494年）にありました。教皇アレクサンデル6世の仲介でスペインとポルトガルが新発見の領土の南北極間に線を引き、カッポ・ヴェルデ [グリーン諸島]から想像で西370海里を境界線として決めたトルデシージャス条約はこの地で定められました。その時の計測の間違いから中南米で唯一ブラジルがポルトガル領となったと言われております。線引きの遠因はこの条約にあるようですが、アンリ・ベルナールはなぜかトルデシージャス条約という歴史用語を用いません。

この条約により、マカオや日本はポルトガルのイエズス会に優先権が与えられていたようです。わたしにはなぜそれら修道会が互いにいがみあうのかわかりません。わずかに理解できるのは、時代はくだりますが、十八世紀に中国で起こった「典礼論争」程度でしょうか。「典礼論争」については、中国人の先祖崇拜を宗教行事とは一線を画した習俗と解するイエズス会の解釈（いわゆるアコモダチオ「適応政策（主義）」）がよく知られているからです。

さらには、フランスの比較文学者エチャンブルが指摘していることです

が、中国におけるキリスト教布教の先駆者、イタリア人マテオ・リッチは、中国語にはDの文字がないため、ラテン語の神DeusをChang-ti（上帝）とか、Tien（天）とか呼んでいたということです。イエズス会に後れて中国での布教を開始した他の修道会は、このようなイエズス会の現地「適応政策」を法王庁に告発したわけです⁽⁶⁾。

さて、ドミニコ会士がマニラに到着した年（1587年）は、秀吉が「伴天連禁教令」（1587）を発令した年にあたります。その前後から、当時、スペインの副王領であったマニラと日本とはひんばんに交流があったようで、モルガの本には秀吉の命令をうけてマニラへ行った原田喜右衛門が登場しますし（同p.61. / pp.117-118）、当時マニラには1500人以上の日本人がいたようなことまで判明します（同p.288）。

ですから、秀吉の命により犠牲となった長崎西坂の26人磔刑（1596=慶長1年）の悲報がマニラに届いたのは何と翌年の1597年だったようです（同p.115）。クールテがマドリッドに着いたのは、1628年12月8日で、5年（又は6年）をかの地で過ごしていますから、マニラ入りしたのは、1633年か、1634年でしょう。マニラには一年しか滞在していませんから、琉球に潜入したのは1636年とされています。ですから、クールテは日本の長崎での秀吉による磔刑の犠牲者（26人）が出たことも知っていましたし、1633年に出た徳川家光による、渡来する外国人に対する厳しい取締令を承知していたことでしょう。といいますのも長崎における26人もの殉教者の事件は、おそらくはマニラ経由でしょうが、ヌエバ・エスパニャ（後のメキシコ）にも伝えられていたからです。

- 4) ここで脱線をお許し下さい。メキシコのクエルナバカCuernavacaのフランシスコ会修道院にはカトリック教徒にとって、この大事件を描いた壁画が残されています。日欧交流史研究の権威、松田毅一氏は1970年に現地を訪れて、この修道院の壁画について詳細な報告をされていますが、わたしは松田氏に後れること36年、2006年に、現地でこの壁画を見る機会に恵まれました。修道院内部は採光が悪いため、壁画全体はぼんやり見えるだけでした。とはいえ、松田氏が記されているように“……RESIVENEN JAPON……EMPERADOR, TAYCOSAMS, MANDO,MARTIRIZAT, POR……”「日本……皇帝太閤様……により殉教を命ず」とはしっかり読めますし、この絵に描かれた人物たちが長崎における秀吉による磔刑の犠牲

者26人であるのは明白です（松田毅一『江戸 南蛮 東京』、読売新聞社、1971年、p.39。ラテン語表記については、同p.42を参照されたい）。

ただ、壁画に描かれている人物をよく見ますと、日本人であるようでもあり、日本人ではないようにも見えるのです、つまり、松田氏が指摘されたように、作者はどうやら日本人ではなく、外国人のようなのです。当時、徳川幕府は鎖国政策を推し進めていて、日本にやってくるキリスト教の布教者たちが拷問にかけられた上、磔刑に処されるという日本事情はヨーロッパばかりでなく、メキシコでも広く知られていたようなのです。

Ⅱ ギヨーム・クールテの最期

琉球で逮捕されたクールテらは長崎に送られ、尋問をうけた後、まず水責めにあいます。口から漏斗で水をたっぷり飲まされるのです。そうしておいて、からだの上に厚板madriersを置いて、締め付けられたようです。ですから水は、口から、鼻から、耳から、その他から吹き出していた、とピエール・アンベルクロードは書いています（前掲原書）。

これだけではなく、今度は爪に女性のカンザシ（アンベルクロードは日本語を使用しています）を差し込み、それらが肉に食い込むようにさらに力がかけられるのです。

最後に、逆さ吊りの拷問が待ち受けます。クールテらは二週間も拷問に耐え、一緒に渡日した仲間のうち、最後に息を引き取ったのはクールテだった、とアンベルクロードは書いています。

この拷問の様子は、先ほど紹介した、『日本におけるイベリア半島の世紀』⁷⁾という本を書いたスペイン人のアントニオ・カベサスも指摘していますが、本ではギブスコア出身のスペイン人のミゲル・アオサラサ（またはオサラサ）とともに拷問に耐える様子が記述されています。

富田論文が指摘するように、クールテの所属するドミニコ会が、イエズス会、フランシスコ会に比して、日本での宣教活動が出遅れたために、彼らの行動に一層の拍車がかかったということをとえ認めるにしても、クールテらの日本潜航にかんして、日本側はクールテらがマニラ政庁から派遣されたのかどうか問いただしてきます。それに対してクールテは、自分らの渡日は「マニラ政庁とは無関係だ」と返答した、とジュール・クールテは書いています（前掲書p.36）。

アンベルクロードの本によりますと、幕府の役人たち（キリシタン目明し）は、クールテの話す言葉からスペイン人でないことを察したようです。といいますがクールテはスペイン語が苦手だったらしく、仲間とはラテン語で話していたようだったからです。日本側役人には、フランスという国が存在するらしいことは分かっていたようですが、日本の文献ではじめてフランスが登場するのは、西川如見『華夷通商考』（1695年）であることがアンベルクロードの研究で判明しています（同書p.365）。そこでの大国フランスの扱いは、マダガスカル島と同じくらいの行数で片付けられていたようです（同書p.374）。

Ⅲ クリストヴァン・フェレイラ（1580-?）の棄教

先に引用したアントニオ・カベサスは、幕府によるキリスト教弾圧のヨーロッパ人犠牲者の数を列挙しています。スペイン人殉教者54人、ポルトガル人殉教者36人、イタリア人殉教者13人、フランス人殉教者は1名と出ていますので、この1名はクールテを指すことになるでしょう（前掲書p.509）。

このように、ヨーロッパから日本に来た大半の宣教師は、幕府の役人たちのひどい拷問に耐えながらも、宗教上の信念を貫き、殉教していくのですが、中には拷問に屈して、棄教した人物もいました。ポルトガル人のイエズス会士、フェレイラが代表的な例で、日本のカトリック作家、遠藤周作がこのフェレイラを主人公として名作『沈黙』を書いたばかりでなく、「フェレイラの影を求めて」というエッセイまで書いて、この人物を問題にしています。フェレイラこそは、カトリック教会の鬼門にふれるテーマではないでしょうか。ヨーロッパではフェレイラが背教者になったことが信じられなかったばかりか、その消息が長らくわからなかっただけに、遠藤周作の小説に登場する2人の登場人物のように、その真相を現地で確かめようという動きがあったことも事実だったようです。

ここで幕府役人が課す厳しい拷問にフェレイラが耐えることができずに、ついに棄教した「穴吊りの責め苦」について、ジャック・ブルーストは誰よりも明快に、次のように書いています。

「犠牲者は頭を下にして、糞尿の満ちた穴の上につるされた。胴体は縄でひじょうにきつく締めつけられ、血液が脳へ流れ込むのをさまたげた。いくらかの血液の排出を可能にして脳出血を防ぐために、こめかみが割られた。

穴から発散する有毒ガスは軽度の麻酔作用を持っていた。その結果、犠牲者の苦痛は引き延ばされることができた。日本の審問官たちは、非人間的で終わることのない苦痛と棄教を天秤にかけよう犠牲者に強いたのである。犠牲者にとって唯一の救済は、身振りでもう終わりにしたいと合図することだった。この目的のために二本の手のうち片方が縄から自由にしてあった。」(ジャック・ブルースト前掲訳書p.69)

背教者フェレイラは、この拷問に耐えることができず、日本のキリシタン取締りの役人に棄教を宣言するのです。

フェレイラの他にも、背教した、つまり「転んだ」キリスト教徒がいたと推測されますが、布教者の中になぜキリスト教を捨てる者がでたのかという理由にまでは、アンベルクロードも、先ほど引用したばかりのスペイン人カベサス氏も解明されていないのです。カベサス氏にしても、フェレイラについて簡単にふれているだけなのです(同書pp.550-551)。すなわち、棄教の後には、日本名、沢野忠庵と称し、幕府のために通訳として働いたと書いているだけで、つまりは、潜入してくる外国からの布教者にたいして、キリシタン目明しになったと書かれているだけです。

繰り返しになりますが、カトリック側の、いわば鬼門にふれるフェレイラの棄教をキリスト教世界の古層にまで分け入って解明された研究に、恩師ジャック・ブルーストの見事な分析があります。ブルースト教授の本には、フェレイラだけではなく、同じくポルトガル人で、渡日したアルメイダも取り上げられています。わが国では、アルメイダにかんしては、東野利夫著『南蛮医アルメイダ 戦国日本を生きぬいたポルトガル人』(柏書房、1993年刊)のような本が出版されているように、もっぱらヨーロッパ医学を日本人に教えた恩人として顕彰されています。

ブルースト教授は全く別の観点から二人がなぜ日本に渡来したかを分析されています。教授はアルメイダとフェレイラの出自、つまり、ポルトガル出身であることに注目し、この国ではスペイン、その他から追放された多数のユダヤ人を受け入れたという歴史を解明した上で、この国の古い時代にはこれらユダヤ人は、ポルトガル人と同等に見なされるようにとカトリック教徒に「改宗」して、「新キリスト教徒」になった過去をあぶりだしてみせたのです。ブルースト教授によると、フェレイラは、エラスムスの著作を読んでいたようですが、エラスムス主義の漂う「空気の中」(同書pp.65-66)にはいたらしいのです。スペインにおけるエラスムスへの風当たりのすごさ

を、わたしはサラマンカ大学図書館で目の当たりにしたことがあります。エラスムスの著作の中で検閲にあたるとされる箇所はすべて、鋭いナイフで抉られたり、黒く塗りつぶされたりしていました。

このように、キリスト教世界の、いわば古層に分け入って、教授はポルトガル人の一部が居心地のよくない母国を後にして、なぜ遠隔の日本にまで渡来してきたのかという二人の来歴を分析されたのです。とくに、フェレイラにいたっては、ポルトガルのユダヤ人改宗者、つまり「新キリスト教徒」のように、日本で彼はキリスト教を棄教し、「新仏教徒」沢野忠庵に生まれかわったというわけです。教授は、それに似通っている例がポルトガルにあったことまでを指摘されたのです（同書pp.69-70）。

フェレイラが棄教した後は、日本のキリシタン取締りの役人の手先になり、ヨーロッパ人宣教師の拷問に通訳として立ち会ったばかりでなく、『顕偽録』という本を書いて、キリスト教を断罪しています。

アンリ・ベルナールの論文では、日本におけるイエズス会の影響は、同会士が日本から追放後の方が大きかった（前掲書p.111）との指摘がありますが、影響というものは後からやってくるものですからこの指摘は正しいにしても、一例として本業が医師ではない背徳者フェレイラが、わが国における南蛮医学に影響を残したというのは、にわかには首肯できかねるからです。といいますが日本人沢野忠庵となったフェレイラは、長崎のオランダ商館のオランダ人医師から西洋医学を習得しているからです。驚くことに、そのフェレイラから医学を学んだ弟子に杉本忠恵がいたのです。

むすび

渡日したクールテがたとえ日本人と首尾よく接触できていたにしても、1549年に来日したザビエルもてこずったように、日本語という言葉の問題にぶつかったにちがひありません。そのような難題すらものともせず、日本人にキリスト教の福音をもたらそうとしたクールテのひたむきな熱意と勇氣にわたしは信仰心のあるなしにかかわらず、感動すら覚えるのです。アンベルクロードの評伝（前掲書p.145）でも、この点がクールテへの最大のオマージュになっているように思います。

クールテ関係の本を読むにつれ、日本へ赴けば、どのような運命が待ち構えているかも承知で、マニラから渡来したのですから、わたしのごとき、信

仰心を全く持ち合わせない者にとっては、まさに想像を絶する行為だったといってもいいでしょう。セリニャンで耳にしたことですが、クールテの名前ギヨームが男の子の名前として、増加傾向にあるとのことで、それを示したグラフを実際に見てまいりました。

他方、ザビエルの来航以来、日本での長い布教活動で知られるイエズス会については、高瀬弘一郎氏らの研究で、会士の中に領土獲得の野心を有した者のいたことが明らかになってきておりますが、ある時、この点を『ザビエルからはじまった日本の教会の歴史』の著者であるイエズス会士で、日本二十六聖人記念館館長の結城了悟氏（1922-2008） [= スペイン語名ディエゴ・パチェコ氏] に口頭で伝えたところ、「高瀬氏はまちがっている」とたちどころに否定されてしまいました。このように日本におけるキリスト教伝道史は、いまでも一筋縄ではいかないところがあるようです。

なお、当時の日本における為政者が海外から潜入しようとするキリスト教布教者に対しておこなった拷問「穴吊りの責め苦」等（前掲ジャック・ブルーノほか）については、鎖国時代のわが国における異教の伝道師に対する弾圧が現代人の目には過度に非人道的だったように映じるかもしれません。

そこで、最後にカトリック教一色になりつつあった当時のフランスから、ユグノー（新教徒）であったが故に追放されたピエール・パウル（1647-1706）の言葉で、わたしの話を終わりにしたいと思います。というのも、彼の言葉には当時の日本の為政者を擁護しているようにも解される文脈が含まれているからです。

「十六世紀のキリスト教には、初代三世紀のキリスト教と同じような神の恵みと加護を期待する権利はなかったのである。初代三世紀のキリスト教は温厚で穏やかで我慢強く、臣民には主権者への服従を説き、反乱によって王座へつこうとは思わなかった。しかし、十六世紀に非キリスト教へ告げ知らされたキリスト教はそんなものではもはやなかった。それは五、六百年来殺戮に慣れた、血に飢えた、人殺し宗教だった。はむかう者を皆殺しにして勢力を維持し拡大するという長い長い[ママ]習慣が身についていた。屠殺人、



セリニャンに聳え立つギヨーム・クールテ（1590? Sérignan-1637 Nagasaki, Japon）の像

首切人、身の毛のよだつ宗教裁判所、十字軍、臣民を反乱にそそのかす勅書、謀反をあおる説教師、陰謀、君主の暗殺——こういうことが自分の命令に従わぬ者に対して使う常套手段だった。そんな宗教が、原始教会に、平和と忍耐と温順の福音に天が与えた祝福を期待すべきだったのか。日本人がとるべき最善の道は、真の神に改宗することではあった。しかし、にせ宗教を捨てるだけの知識がなかった以上、彼らに残された道は迫害するか迫害されるかどうかを選ぶことしかなかったのである。キリスト教を片付けないかぎり、日本人は古来の統治も古来の祭祀も維持できなかった。キリスト教徒は早晩この二つをとともに滅ぼし、新しい信者にこぞって武器を取らせ、スペインからの援軍と同じくスペイン人の残虐な格率[ママ]をあの国に導き入れたろう。そして、アメリカでもしたようにさんざん人を殺し、しばり首にして、それで日本国中を支配してしまっただろう。だから、キリスト教徒があゝの国で蒙った迫害も、君主制の転覆と国の荒掠を未然に防止するために愼慮が取らせる手段の範疇に入っていたことを認めざるをえない。」(ピエール・ベール著、野沢協訳『歴史批評辞典』(法政大学出版局、1984年刊)の中の項目「日本」p.361)

遠隔のヨーロッパから渡来した布教者の中にもいろいろな人がいたことでしょう。その中にクールテのように「純粹に宗教上」の理由からキリスト教を伝えようとひたむきに願ったフランス人が今から400年も前にいたのだということを皆様にお知らせして、わたしの話を終わります。

[本稿は2012年10月10日に日仏会館でおこなった講演原稿をおこしたものが、今回文章化するにあたって、大幅に加筆した。](2016年12月20日記)。

注

- (1) Jacques Proust, *L'Europe au prisme du Japon. XVI - XVIII siècle*. (Albin Michel, 1997).
- (2) Jules Courtet, *Notice sur Le V.P. Guillaume Courtet. Religieux Dominicain. Premier Martyre Français au Japon*. (Avignon, 1868). Reedition en-faxsimille. (APAPEC, 2005).
- (3) Pierre Humbertclaude, *Guillaume Courtet Dominicain Français Martyre au Japon (1590-1637) avec la collaboration de Joseph Estournet cure de Sérignan et de Dominique Dye o.p.* (Les Editions du Cerp, 1981).

- (4) Henri Bernard-Maitre, Pierre Humbertclaude, Maurice Prunier, *Présence Occidentales au Japon. Du "siècle chrétien" à la réouverture du XIXe siècle.* Edition établie et présentée par Christophe Marquet. (Cerp histoire, 2011). p.11.
- (5) Morga, *Sucesos de Las Islas Filipinas por El Dr. Antonio de Morga. (1609) ./ Morga, Sucesos de Las Islas Filipinas por El Dr. Antonio de Morga.* Nueva Edición por W. E. Retana. (Madrid, 1909).
- (6) Etiemble, *Les Jésuites en Chine : La querelle des rites (1552-1773).* (Gallimard, 1973).
- (7) Antonio Cabezas, *El Siglo Ibérico de Japón. La presencia Hispano-Portuguesa en Japón (1543-1643).* (Universidad de Valladolid, 1995), p.509.

片桐一男著『江戸時代の通訳官——阿蘭陀通詞の語学と実務』

(吉川弘文館 2016)

岡田和子

本書の狙いは、表紙カバーの裏に次のように書かれている——《幕藩体制下、貿易国オランダとのやり取りをすべて担った日本側の通訳官「阿蘭陀通詞」^{おらんだつうじ}。彼らはいかに異国の言葉を学んだのか。海外情報の翻訳、注文書作成、カピタンの江戸参府への同行など、苦闘する通詞の姿を追う》。この書には史上有名な人物は出てこない。有名人の絡む重大事件への言及もない。幕末の条約交渉で表に出るまで裏方に徹した阿蘭陀通詞という一団に、ひたすら焦点を当てている。

本書の内容は、大きく3部に分かれる。第Ⅰ章は、阿蘭陀通詞のオランダ語学習について。第Ⅱ～Ⅲ章は、彼らの組織と仕事内容について。第Ⅳ章は、23名の阿蘭陀通詞のポートレートである。以下、本書の目次をそのまま挙げて、内容を略述する。

第Ⅰ章は語学編である。

はしがき

I 阿蘭陀通詞とオランダ語

一 実務が育てる語学

- 1 聞き分けられるか
- 2 読めるか、訳せるか
- 3 蘭訳はできるか、書けるか

二 南蛮から紅毛へ、語学条件の大転換

- 1 南蛮人の活動と「ことば」「日本語」
- 2 紅毛人の来航・活動、鎖国体制の完備と「ことば」の大転換

三 阿蘭陀通詞の育成

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 通詞の養成 | 2 家業試験 |
| 3 通詞のオランダ語学習の順序 | |
| 4 アベブック、レッテルコンスト | |
| 5 単語集エンケル・ウォールド | 6 会話集サーメン・スプラーカ |
| 7 辞書編纂 | 8 オップステルレンと文法書 |

まず、入港の際に阿蘭陀通詞によって行われる諸事が述べられる。船籍の見極め、オランダ語による風説書（海外情報）の翻訳、乗船人名簿、積荷目録、書簡類の翻訳、逆に日本からオランダへの注文書の作成が、通詞の仕事である。

通詞の言語は、最初はポルトガル語であった。日本を訪れるのが南蛮人から紅毛人に、すなわちポルトガル人からオランダ人になった時、言語政策はどうなったか。ポルトガル人の方が長年日本に留まって、日本人以上に日本文化に通じ、日本語が堪能になったのが信長・秀吉時代である。それに対して、オランダ商館が出島に閉じ込められた江戸時代になると、商館長の滞在は一年交代になり、オランダ人の日本語習得も禁止となる。ここに、長崎の通詞集団養成の理由が生じた。

では、通詞たちの勉強はどのようなものであったのか。従来知られた事実のほかに、本書では、ひとつの劇的な経緯によって、彼らの受けた実力試験の内容が判明する。さきごろシーボルト記念館に持ち込まれた《長崎の旧家の畳の下に敷かれた反古》が、実は過去の蘭文の試験問題とその答案の写しだったのである。そして、その過去問は、出島でオランダ側から実際に提出された文書であった（31頁）。

次に、話は、オランダ語の学習において初心者は何を用いたかに移る。アルファベットの読み書き、単語帳、日常会話と作文、算術の順に学習するのだが、その際使用された当時の本が、豊富な図像で紹介されている。単語には、当時の役職名（長崎奉行、町乙名）や貿易関連（羅紗、納日^{イリヒ}）の特殊な蘭語・和語が盛られ、現代人には珍しく、見ていて飽きない。

学習が進めば、当然のこと日蘭辞書が必要となる。用いられた原典は、蘭仏辞書のF. HalmaとP. Marinであるが、これについては研究が多々あるので、文法書の方に注意が向けられている。文法書とは、即ち、中野柳圃と馬場佐十郎の二人の著作である。中野柳圃はW. Sewelの文法書を用いて体系的な蘭文法研究を始め、その弟子である馬場は、それを江戸の蘭学界に広め、自

身も Palm の文典を『西文規範』と題して翻訳している。

ここで、ひとこと私言を挟ませていただきたい。何故なら、Sewel であれ Palm であれ、当時の文法は現代のものと内容的に異なっているからである。柳圃と馬場の文法は119～140頁に紹介されているが、彼らの品詞分類や時制構成を現代文法、特に英文法の知識で以って見ると、完全に理解を誤る。例えば、136頁の表の《時制扶助動詞》《常用動詞》の原語は Hulpwoorden、即ち「助動詞」であるが、これは can, must 等のことではない。また、形容詞は名詞の下位区分で、逆に、動詞の分詞が一品詞扱いである。

更に、この書では触れられていないが、柳圃と馬場が《過去ノ現在》というときは、単なる過去形を指し、《過去》は、英語で言えば have+p.p. を指す。これは当時の西洋語文法自体がそうになっているからで、彼ら二人の時制理解が間違っているわけではない。こういう点に留意して、欧州で出版された原典および阿蘭陀通詞の文法研究——馬場の言葉では《文学》（清国の訳語。「文章の学問」だからこう呼ぶ）——を見ていただきたい。

第Ⅱ章から実務編に入る。

Ⅱ 長崎の阿蘭陀通詞

はじめに

一 通詞採用の任命と辞令

- | | |
|------|------|
| 1 任命 | 2 辞令 |
|------|------|

二 職階と役料

- | | |
|------|------|
| 1 職階 | 2 役料 |
|------|------|

三 職務と加役

- | | |
|------|------|
| 1 職務 | 2 加役 |
|------|------|

四 通詞会所と通詞部屋

- | | |
|------------------|-----------|
| 1 位置 | 2 備品 |
| 3 機能 | 4 日直と宿直 |
| 5 扶持米・受用銀などの受け取り | 6 定例年間業務 |
| 7 貿易業務と通詞 | 8 カピタンと通詞 |

五 異国船と通詞

ここでは、《長崎の町人身分であった阿蘭陀通詞の、長崎における地位と職務は、どんなものであったか》（142頁）が述べられる。

通詞には下から順に、口稽古・稽古通詞・小^こ通詞・大^{おお}通詞の階級があり、長崎奉行が任命。これら正規の通詞職とは別に、内通詞と称する一群がおり、両者を統率するのが阿蘭陀通詞目付役である——から始まって、給料はいくらか、どんな仕事をこなしていたのか、詰所はどこか等々、彼らの日常環境が、《必携書》（現代というマニュアル本）、地図、帳簿等の各種の記録類から明らかにされる。

およそ劇的な事件とは関係ないので、退屈と言えば退屈かもしれない。が、彼らの扶持米が《二ヵ月ごとに、長崎代官所の米蔵から支給された》（170頁）という一文を目にした時、ふと思った。月給制ではなく、今の年金支給法と同じではないか、と。大通詞の給料《五人扶持 銀11貫目》というのは、現代の価格に換算したら一体いくらになるのであろう。

彼らの給料は、「地下配分金」といわれる7万両から支払われたが、これは、7代家継公のとき、《貿易の好不況に関わりなく毎年最低保障されることになった》（151頁）という。現代風にいうなら「ベーシック・インカム」は保障されていたということか。賞与アップは簡単には望めないとしても。

174～176頁までは、年間業務と貿易に関わる業務が、ずらっと並べられている。一見して眩暈がする。というか、まさにお役所仕事の典型である。だが、通詞たちがこれら複雑な手続きを継続的にこなすことによって、出島での貿易は維持されていたわけである。

共感を覚えるのは、191頁から始まる、通詞とオランダ商館長とのやり取りである。さまざまな贈答品はもとより、「お腹が空いたので、パンもらえます?」「ちょっとこれから行ってもいいかな?」のような通詞の呼びかけが、《いとも尊敬せる商館長殿、貴下の…》のような調子で書かれ、内容と文章とのギャップに思わず笑ってしまう。商館長が付き合った芸者との遊び代も蘭訳して届けている。親しくなった人との、いつの世も変わらぬ付き合いの風景。まさに現代のLine。本書で唯一心がほぐれる部分である。

しかし、その一方で、異国船の来航に何度も苦い経験をしていた長崎は、いざという時のための《必携書》（マニュアル本）の作成を怠らなかったのである。オランダ語だけでなく、国際公用語であるフランス語の文面も、商館長の協力のもとに用意された。これが、阿蘭陀通詞というもののなのであった（233～237頁）。

第Ⅲ章では、残されたマニュアル本から、江戸の將軍家に拝謁するオラン

ダ商館長に従っての旅の内容が再現される。

Ⅲ 江戸の阿蘭陀通詞

一 江戸番通詞の参府御用

はじめに

- 1 『江戸行一件書留』の構成
- 2 『江戸行一件書留』の内容
- 3 江戸逗留中 マニュアル・ブック
- 4 江戸番通詞の御用と私用

二 参府休年出府通詞の参府御用

三 天文台詰通詞の御用と私用

『江戸行一件書留』と、反古8枚を復元した新資料『江戸番通詞江戸逗留中勤方書留』に拠ると、さまざまな進物を整え、将軍拝謁を済ませて、オランダ人一行が無事長崎に帰るまでの陸路と海路の旅路を成功させるために、その陰で阿蘭陀通詞がどれだけのことをしたかが判る。旅費と支度料の手配はもとより、いくつもの目録作成。中には、《献上酒試飲のためにコップが2個入用》というのまである（248頁）。《江戸番大通詞は川崎宿より、一行より先に出立して》、いろいろな根回しをしなければならなかった（266頁）。まことに気苦労の多い大役だったと容易に察せられる。

また、阿蘭陀通詞は、任期3～4年で江戸の天文台に勤めた。1792年のラックスマン以降、日本近海に異国船出沒が頻繁となったため、幕府は、1811（文化8）年5月、天文台に「^{わけ}蜜書和解御用」の一局を設置、阿蘭陀通詞はそこに常駐することになったのである。

288～291頁には15名の通詞が挙げられているが、その初代が、第Ⅰ章に登場した夭折の天才・馬場佐十郎である。幕府の御家人となった彼が江戸で塾を開きオランダ語を教えたことで、江戸の蘭学界は一変した。即ち、「文法」を頼りに蘭文を読み解くことができるようになったのである。現代の我々が洋文を読解するやり方である。杉田玄白も大槻玄沢も、この《新法》に大いなる期待を寄せている。

第Ⅳ章は、阿蘭陀通詞の列伝である。

Ⅳ 多才で多彩な阿蘭陀通詞

はじめに

一 二十三名の通詞たち

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 西吉兵衛親父子 | 2 榎林鎮山 |
| 3 今村源右衛門・英生 | 4 西 善三郎 |
| 5 吉雄幸左衛門・耕牛 | 6 本木良永 |
| 7 馬田清吉＝石井庄助 | 8 榎林重兵衛 |
| 9 小川悦之進 | 10 石橋助左衛門 |
| 11 志筑忠雄＝中野柳圃 | 12 本木庄左衛門・正栄 |
| 13 馬場為八郎 | 14 新井庄十郎 |
| 15 中山作三郎・武徳 | 16 吉雄権之助 |
| 17 稲部市五郎 | 18 馬場佐十郎・貞由 |
| 19 吉雄忠次郎・永宜 | 20 森山栄之助＝多吉郎 |
| 21 堀 達之助 | 22 本木昌造 |
| 23 西 吉十郎・成度 | |

二 二十三通詞に対する短評

1 短評

おわりに

あとがき

参考文献 附録 索引

2 その他

ここに挙げられた23人の名前は、ほとんど世に知られていない。分かるのは、幕末の条約交渉で有名な堀達之助^{しづき}くらいではないか。ほかには、高校の教科書に名前が載る志筑忠雄（第Ⅰ章の中野柳圃と同一人物）であろう。が、それも、この分野の関係者だから知っているのであって、勝海舟や坂本竜馬のような知名度には遠く及ばない。その弟子の馬場佐十郎ですら全くの無名である。

なお、人名にはルビを振っていただけるとありがたい。英生、耕牛、正栄は音読みが通用している。為八郎は「ためはちろう」（196頁）、武徳は「たけのり」、貞由は「さだよし」（109頁）である。永宜は不明。成度は「なりのみ」「なりたき」「しげのり」の三種があり、出典の辞典がそれぞれ異なっている。

以上の概略に若干の私評を加えて、本書の総評としたい。

江戸時代、長崎の出島でオランダとの交易が行われたことは広く知られて

いる。しかし、そこで活躍した通訳官については、ほとんど世に知られていない。彼らは、身分は町人である。言葉の通訳はもとより、帳簿等の日蘭貿易を取り仕切り、江戸での仕事をこなし、ヨーロッパ語を初めて組織的に勉強した。英語もロシア語もフランス語も学び、本邦初の仏語辞書『拂郎察辞範』を作り上げたのも、彼ら長崎の阿蘭陀通詞である。

その彼らの中に、二人の語学の天才がいた。一人は生涯を長崎で学究に生き、その弟子は江戸幕府の御家人となって、天下に「新たな」蘭文法を教える。前者・中野柳圃は、漢文と日本語をオランダ語と比較することにより、日本語の側からオランダ語の文法を咀嚼し、関係者に講義した。その過程で、漢学の用語を参考にして、品詞や時制に初めての日本語名を施している。師匠のこの高度な「比較言語学」を、後者である弟子・馬場佐十郎は、もっと解りやすい形にして江戸の子弟に与えた。一冊のオランダ語教本を日本語に翻訳し、オランダ語の文法用語にもっと整った和名を与えようと試みた。そして、その激務に命を削り、36歳を一期に病没する。

長崎の通詞の仲間内だけならば、原語主義でもよいであろう。しかし、幼少期より直接オランダ人から語学を学べる長崎の環境は特殊である。長崎以外の者たちがオランダ語を学ぼうとすれば、日本語の助け——もっと正確に言えば、漢学と国学の助けが必要となる。柳圃は、この和漢の教養が実に豊かであった。ここから、現代の我々が知る「母国語で説明される文法」への道が開かれるのである。

つまり、この二人の天才師弟がいなかったら、日本の西洋語教育はなかったのである。現代の英文法は勿論のこと、第二外国語の文法もまた然りである。彼ら阿蘭陀通詞の活動なしには、江戸期に蘭学は興隆せず、明治維新も成功しなかったのだ。まさに大河源流の一滴。仏学史における江戸から明治期への関心は、ともすればメリメ・カションやロッシュ等の政治的なものに偏りがちであるが、ここで基本に立ち返ってみてもよいのではなかろうか。外国との出会いの最初は、まず「ことば」ありき、なのである。彼らは、「どのような」語学を「どのように」学んだのか。DVDのようなさまざまな機器が揃った現代の日本で、なぜ、語学教育がうまくいかないのか。発音テープの一本もなかった当時の人たちが、なぜ、外国語が上手だったのか。これを考えるうえで、ここに紹介する片桐一男著『江戸時代の通訳官——阿蘭陀通詞の語学と実務』の第一部は、まことに良い手引書となるであろう。阿蘭陀通詞のもとにこそ、語学教授の始まりはあるのだから。

第Ⅱ部と第Ⅲ部は、内容一転して、彼ら阿蘭陀通詞の実務の紹介である。長崎の通訳官には2種類あり、オランダ相手の通訳官は「阿蘭陀通詞」、清国相手のそれは「唐通事」と呼んで、漢字を書き分ける。仄聞するに、後者の研究者の間では、阿蘭陀通詞はただ言葉を通訳しただけなので「通詞」と書く、という理解がされているそうであるが、本書によってそのような謬見もきっと正されると確信する。

そして、第Ⅳ部は23名の阿蘭陀通詞の列伝である。ここを読んで、諸賢には何を思われるであろうか。真に偉業を担う者は無名である——そう思うのは、今この小文をものしている筆者だけではあるまい。彼らは実にさまざまな新知識に接する。実にさまざまな外患に出会う。シーボルト事件では幾多の人材が消えていった。19番目に名の挙がる吉雄忠次郎もそのひとりである。この有名な事件に関しては、すでに多くのことが研究され、関わった幕府役人や通詞の名前を我々は知ることができる。が、それも、この分野の関係者だから知っているのもあって、忠次郎の他にも、例えばシーボルトの陰で実質的に鳴滝塾を切り盛りした吉雄権之助の名は、一般には全く知られていない。しかも権之助は、『諸厄利亜語林大成』^{アンゲリア}『拂郎察辞範』^{フランス}『ゾーフ・ハルマ』編纂の中心人物なのに、平賀源内ほどの知名度もないのである。

NHKで2009年から2011年にかけて『坂の上の雲』が放映された時、秋山好古・真之兄弟の名が一気に知れ渡った。広く国民的知識となるためには、まずは教科書に載ることであるが、それだけでは足りない。国民的ドラマの主演としてメディアが取り上げるにしくはない、と思うことしきりの出来事であった。葉室麟に『オランダ宿の娘』という作品があり、長崎屋源右衛門、ドゥーフとその息子丈吉、ブロムホフ、鷹見泉石等に並んで、小通詞の吉雄忠次郎が登場する。この話の主演は源右衛門の娘だが、いっそ、阿蘭陀通詞を中心人物に据えて、勝海舟を脇役に回した話題のドラマができないものであろうか。

が、実際、彼ら阿蘭陀通詞に関する具体的資料はあまりにも少ない。あったとしても、毛筆走り書きの未刊行資料の解読をしなければならない。ペン書きのオランダ語も読まねばならない。事実、この努力の上に本書は成り立っているのだが、例えば第Ⅲ章で、阿蘭陀通詞の江戸参府の具体的仕事ぶりを書くにあたって、著者の片桐一男氏は、《虫損甚だしく、綴じ糸は離れ、表題紙も失われた「反故」八枚》(264頁)を復元して用いている。このような状況で、どうすればドラマになるような通詞の人物像が描けるのか。

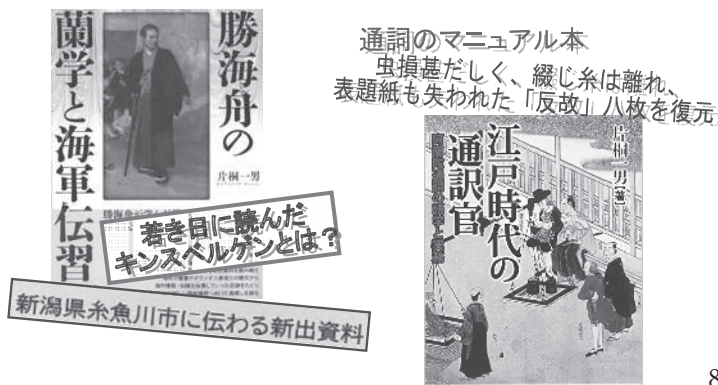
しかし間違いなく、時代は、常に、彼らの上に在ったのである。《二百数十年にわたって活躍し続けた多才で多彩な阿蘭陀通詞たち、その数、万を超すかも知れない》(295～6頁)通詞たちの働きは、確かに地道であったろう。現代風に言えば、公務員の実務なのである。が、その一方で、好奇心に溢れ、時として命を削るほど堅実かつ誠実なその学術的努力は、新分野を開拓し、時代を作り、間違いなく明治に結実する。

日本研究は、すなわち学際研究である。殊に蘭・英・仏・独学史の分野はそうである。本書は、仏学史に無関係では全くない。仏学は蘭学の道の延長線上にある。仏学史研究充実のためにも、ぜひとも本書を紐解いて、《多才で多彩な》阿蘭陀通詞の世界に目を向けていただきたい。

本書の最初は、こう始まる——《紺碧の空の青と海の青が溶け合う真夏の水平線。その彼方から姿を見せた外国船。灯影を認めたあちこちの岬の遠見番から街の長崎奉行所へ急報される》。このように、かつて世界は、日本の前に現れた。第Ⅰ章のページを繰れば、そこは江戸期の長崎への入り口。扉の開く「ぎぎいー」という音が聞こえてくるはずだ。

○追記

なお、本書とほぼ同時期に出版された、片桐氏の『勝海舟の蘭学と海軍伝習』(勉誠出版 2016)も、併せて読まれることをお勧めする。海舟が、若い頃誰からオランダ語を習い、一体何を讀みたかったのか、が解明されている。大部の辞書を書写して、海舟はこの蘭書を読み解き、彼の思想の中核を得るのだが、これほど著名な人物においても、このような肝心な部分は謎のままだったのである。激動の時代を背景に、次々と明らかにされていく新事実がスリリングで、推理小説を読むような面白さがある。



【執筆者紹介】

学 谷	亮	創価大学教育・学習支援センター助教 東京大学大学院博士課程
原 野	昇	広島大学名誉教授
宮 里	厚 子	琉球大学法文学部准教授
中 村	能 盛	名古屋大学大学院文学研究科・博士後期課程
浜 田	泉	明治大学文学部フランス文学科兼任講師 早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員
市 川	慎 一	早稲田大学名誉教授
岡 田	和 子	筑波大学非常勤講師、洋学史研究会・仏学史学会会員 (掲載順)

編 集 後 記

今号への執筆を希望し、期日の2016年9月30日までに意思表示されたのは、前号よりも多く10名であった。その後、ご都合により1名が次号へ延期され、2名が辞退されたので、7名の原稿を2017年1月9日に各査読者へ送付した。査読終了後の2月20日に、査読者からの意見等に基づいて各執筆者へ決定稿の提出を依頼した。締め切りは3月21日であった。3月23日に印刷所へ原稿等を送付し、4月14日に初校が出来上がったので、各執筆者へ送付した。締め切りは5月1日であった。同様に、5月12日に再校が出来上がり各執筆者へ送付した。締め切りは5月27日であり、その後、責了となり刊行の運びとなった。以上が刊行までの経緯であり、次号への寄稿を希望する方々の参考にして頂きたい。

今号も、前号に優るとも劣らず日仏交流に関する優れた内容の研究成果を公表することができて嬉しく思うと共に、執筆者及び査読者の方々に衷心から深謝したい。ところで本誌は従前まで紙媒体での刊行のみで公表してきたが、近年は質・量ともに充実してきたので、より一層広く多くの研究者及び読者が簡便に閲覧できるように電子媒体での公表も行っていきたいとの要望が増えてきた。このため遅ればせながら刊行してから1年後を目途に電子媒体で全文を公表できるように対応を検討したいと思う。勿論、希望しない執筆者の場合も斟酌しなければならない。なお、本誌への執筆希望の締め切りは例年9月末であり、原稿の締め切りは12月末である。(T)

学 会 記 録

月例研究発表会

2016年(平成28年)7月～2017年(平成29年)5月

期 日	回数	題 目	発 表 者	会場
2016. 7.23	474	日仏交流研究について	自 由 討 論	N
9. 3	475	江戸のナポレオン伝説 －ゴロブニーン事件から戊辰戦争へ－	岩 下 哲 典	T
10.22	476	カトリックの日本再布教前史について －朝鮮教区設立からフォルカードの来琉ま でを中心に－	宮 崎 善 信	N
11.28	477	19世紀におけるフランス人宣教師の琉球滞 在について	宮 里 厚 子	N
12.19	478	中江兆民のルソー『民約訳解』をめぐって	三 浦 信 孝	N
2017. 1.28	479	『フランス広文典』の系譜	目 黒 安 子	N
2.25	480	エピナール版画研究の考察 －フランス国立図書館のコレクションをも とに－	上 田 あ ゆ み	N
4.22	481	駐日フランス大使ポール・クロードルの対 日政策	学 谷 亮	N
5.27	482	徳川昭武と多勃都会－日仏交流を支えたも うひとつの人脈－	小 寺 瑛 広	N

会 場：N＝日仏会館 恵比寿（5階洋室）

T＝東洋大学白山キャンパス（125記念ホール）

◇第40回日本仏学史学会全国大会

日 時 2016年(平成28年)6月25日(土) 10時00分～17時40分

会 場 日仏会館5階 洋室501

東京都渋谷区恵比寿三丁目9-25

総合司会 池 村 俊 郎

開会の辞

清 水 勲

○研究発表

- ・「明治維新时期におけるフランスからの男子服意匠導入の
歴史－徳川慶喜に贈呈された軍装品及びフランスと日
本の紳士服技法書について－」

中 村 茂

笹 崎 綾 野

司会 寺 本 敬 子

- ・「フランス傷病兵日本後送の経緯」

原 野 昇

司会 浜 田 泉

(昼 食)

○シンポジウム「仏学史研究の原点と将来

—全国大会40年にちなんで—」 司会 加 藤 豊 子

パネリスト

「日本仏学史研究会創立前後」

西 堀 昭

「歴代会長の思い出」

清 水 勲

「長野とフランス」

滝 沢 忠 義

コメンテーター

「川島家所蔵の日仏史学会関係書簡」

川 島 瑞 枝

「事務局十年」

平 野 実

○総 会

議長 中 川 高 行

閉会の辞

平 野 実

懇 親 会

ビヤステーション恵比寿(2階)

(役員)

会長
副会長
理事

清池 水村 勲
市川 中子 俊郎
川白 滝井 智弘
中平 島野 忠裕
ブレンダン・ル・ルー
川 島 瑞 枝

加藤 藤 豊 子
樟 家 重 敏
高 村 雅 一
中 川 高 行
浜 田 弓 泉
平 山 月
渡 邊 昭 造

(事務局)

事務局長
事務局長代行・会計
幹事・Eメール配信
幹事
ホームページ

中 川 高 行
加 藤 豊 子
飯 島 幸 夫
今 井 隆 太
学 谷 亮

松 島 進
中 津 匡 哉

(学術委員会)

委員長・学会誌
総 合
月 例 会
月例会・学会誌
学 会 誌

浜 田 泉
池 村 俊郎
加 藤 豊子
中 川 高雅
高 村 一

清 水 勲

(編集委員会)

清 水 勲
中 川 高 行

高 村 雅 一
浜 田 泉

(2017年4月1日現在)

ISSN 0386-6637
Furansugaku Kenkyu

『仏蘭西学研究』 第43号(1972年創刊)

2017年(平成29年)6月24日発行

頒価 1,500円

発行人 日 本 仏 学 史 学 会 清 水 勲
事務局 駿河台出版社内

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 3 - 7

電話 047-324-3786(事務局直通・中川)

印刷所 スピックバンスター株式会社

〒112-0014 東京都文京区関口 1 - 47 - 12

電話 03-5225-4142

ETUDES FRANÇAISES

24. 6. '17

N° 43

TABLE DES MATIÈRES

ARTICLES

- Paul Claudel et les *Genrô* Ryô GAKUTANI.....3
- Témoignages français sur les circonstances de l'évacuation des
blessés de guerre au Japon..... Noboru HARANO.....14
- Les séjours des missionnaires français dans le royaume des
Ryûkyû au XIX^e siècle : activités missionnaires et études
linguistiques Atsuko MIYAZATO.....27
- Représentation du régionalisme dans la collection « *Choix de
lectures françaises* » Yoshimori NAKAMURA.....40
- La jeunesse de Mitsuo NAKAMURA et son expérience en
France : des années 1930 *Jusqu'à la guerre* (Sensô-made), puis
jusqu'aux années 1940 Izumi HAMADA.....47

CONFÉRENCE

- Conférence organisée le 10 octobre 2012 par la Maison
franco-japonaise : sur « Guillaume Courtet, le premier Français
à être venu au Japon » Shin-ichi ICHIKAWA.....65

COMPTE RENDU DE LECTURE

- Kazuo KATAGIRI, *Les interprètes à l'époque d'Edo : Langues
et Pratiques des interprètes hollandais*...Kazuko OKADA.....79

- ACTIVITÉS DE LA SOCIÉTÉ89